

フランス温泉療養リゾート沿革

成沢広幸

はじめに

- ・ 古代と中世の温泉療養
 1. 古代
 2. 中世
- ・ ルネサンス以降20世紀前半までの温泉療養
 1. ルネサンス
 2. アンシャン・レジーム
 3. フランス革命から7月王政まで(1789-1848)
 4. 第二帝政(1852-1870)
 5. 第三共和制時代の発足から世紀末へ
 6. 20世紀初頭のフランス温泉事情
 7. 第一次世界大戦
 8. 世界恐慌から第二次世界大戦へ
 9. 温泉リゾートのイメージ創造力

おわりに 保養リゾートの交代

はじめに

ユージェン・ウェーバーはその著『フランス、世紀末』¹⁾において19世紀後半のフランス社会の諸相を描く中で「温泉療養者と観光客」Curistes et touristesという章を設けてこの時代の温泉療養リゾートの発展を語っている。海浜や山岳などに先駆けてリゾート(保養地)の原型となった温泉町が、パリや避寒地(カンヌ、ニースなど)での冬の社交シーズンを引き継ぐ春から夏にかけての社交シーズンの舞台となり、そこに裕福な階級が集った当時の事情のなかでは、温泉療養者と観光客という二種類のカテゴリーはたいてい分かちがたく結びつき、療養と社交は一体のものとなっていたのであった。鉱泉利用を医学目的(鉱泉療養)、商業目的(ミネラル・ウォーター製造販売)、観光目的(社交、保養)と区分するのは²⁾現代であり、そうした観点からは温泉療養を巡礼や別荘滞在と並んで観光の「同根異義語(les faux amis)」(直訳すると「偽りの友」)³⁾とする立場も生まれるのだが、しかし、かつてこれらは渾然一体となつて一つの社会現象を構成していたし、現在でも事情はある程度そうである。現代の基準を現代以前に適用して、ある総合的な現象を細分化され、有機的な関連のないような形で理解することは避けねばならない。

本稿はこのように医学と観光の共通領域である温泉療養のフランスにおける沿革を検討する試みである。しかし温泉療養においても一般的な観光においても年代的、数量的な断絶が存在する。象徴的には1936年の有給休暇制度の創設、実質的には第二次世界大戦を契機とする断絶、すなわちあえて単純化すれば「無為裕福な少数者」の時代と「マスツーリスト」の時代を分かち断絶である。温泉療養におけるもっと詳細な時期区分は三つとなる。すなわち経験則のみに基づいた古代から中世まで、経験則から科学的評価に移行したルネサンスから20世紀半ばまで、そして社会保障制度によって大衆化した温泉療養が出現した20世紀後半である。本稿ではルネサンスに始まる近代的温泉療養の時代を中心に、それ以前の歴史にも触れながらこの社会現象を検討し

てみたい。従って第二次世界大戦後の大衆化した温泉療養については別稿に譲ること
としたい⁴⁾。

． 古代と中世の温泉療養

1. 古代

起源は歴史の闇の中に没しているが、自然に湧出する源泉を利用して傷病を癒すことは洋の東西を問わず、また人間と動物の区別なく行われてきた。温泉は紀元前3000年紀ないし4000年紀にはエジプトで利用されていた。ローマ人に征服された北イタリアの先住民族エトルリア人は温泉療養を組織的に行うために源泉周囲に贅沢な温泉施設を建設したり、鉱泉の調査・研究・管理を行う制度をもっていた。カルタゴ人とギリシャ人も温泉を開発し、ギリシャ人はその効能を記録している。ヘロドトスは三週間つづく温泉療養について語り、ヒポクラテスはある種の病気の治療を温泉に求め、アリストテレスやホラティウス、セネカなどは、ある病気を治すにはこの温泉というように温泉の適応症を記している⁵⁾。また「ギリシャとローマの温泉療養は巡礼と共に『医学的な旅行』にも結びついていた。治癒のためには温泉に入浴することが必要だとすでに考えられていた。当時温泉は体を浄化する効能を持つものと考えられていた。温泉の特質と共に神々が治癒を行ったのだった」⁶⁾。現代のフランスにあたるガリア地域でも、先住民族ケルト人が多くの源泉を利用していった。温泉はその治癒能力によって神秘的な力を持つと信じられていた。「大地の奥底から神秘的に噴出してくる源泉は地下にあるもの、地球的なもの、母性的なものすべてに認められている霊験をもっているとされた。とりわけ源泉は神聖な場所であり、その活動は常に恵みをもたらすものであった。源泉が例外的な、熱い、沸騰するような性質、あるいは悪臭を放つ性質でさえあっても（恐るべき硫黄の「異臭」）、それらの源泉は人間の目には温泉の治癒能力の証と映ったのである」⁷⁾。従ってこのような温泉の魔術的あるいは信仰的な面を考えれば、ケルト人の源泉の神ボルヴォBorvoが、ブルボヌ・レ・バン、ブルボン・ラルシャンボ、ブルボン・ランスイなど各地の温泉に名を残していることは驚くにはあたらない。次いでローマ人の侵入によってガリア各地の温泉数は増加した。ローマ文明のガリアへの移植はそれまでの温泉療養に大きな変化を与えた。「ローマ人は医者や技師、それに実業家の長い経験の結果である恩恵に浴していた。至る所に温泉施設が建設され、そのいずれの場所にも鉱泉が湧出していた。どこでも大都市は、たとえその水がいかなる効能を持たないものであっても公衆浴場を備えたがった。...

明らかにローマ人は

良好な収益を挙げる性格の贅を尽くした施設、つまりホテルと鉱泉治療が複合した総合施設の建設に優先権を与えていた。そうした贅沢な施設は都市生活に疲れた無為で裕福な社会層や高級公務員、将校などを引きつけた。しかしながらそうした施設はそのほかの社会層にも、もっと規模が小さくその豊かさも控えめであるが複合温泉治療施設を提供することにも熱心であった。今日ならば六星ランクに値するだろう大規模な温泉施設の周りに、もっと規模の小さな多くの施設が建ち並び、兵士が体力を回復したり、商人や旅人、地元のブルジョワなどがくつろいだり病気の治療をすることができたのであった」⁸⁾。このようにしてガロ・ロマン時代にすでに有名であった温泉は途中に変遷を経験しながらも現代に多くが引き継がれている（たとえば現代名でいうとエクサン・プロヴァンス、ル・モン・ドール、エクス・レ・バン、パニェール・ドゥ・リュション、ダックス、ロワイヤ、ヴィシー、ブルボン・ラルシャンボ、ネリス・レ・バン、ブルボヌ・レ・バンなど）。そこでの温泉療養は今日と同じように

基本的には入浴と飲用であった。しかし経験的に大雑把な適応症が温泉ごとに知られていたとしても、当時の温泉療養は信仰と治療が渾然一体となったもので、源泉や温泉に人形などの奉納物を投げ入れたり、温泉近くに感謝の碑が建立されたりした。

ガロ・ロマン時代の温泉町のもう一つの特徴もまた近代に引き継がれた。それは、少なくとも大きな温泉町は娯楽と享楽の町でもあったということである。演劇や剣闘士の試合が催され、裕福な療養者のための贅を尽くした住居が建設されたが、それらは19世紀後半の温泉療養リゾートを彩るカジノや別荘の遙かな起源なのである。また温泉自体もローマ帝国初期を脱すると混浴となり、「こうして雑居状態が生まれたが、それがいかに魅力的なものであるにしても、それは放蕩へと変質して行った。公衆浴場は娯家にもたとえられる快樂の場所へと変わったのである」⁹⁾。

こうした風紀紊乱に対するローマ帝国の規制や、国教化されたキリスト教教会の側からの異教の信仰に結びつくものとしての温泉への非難が行われたが、それらよりもさらに強力に温泉の衰退を促したものは、紀元3世紀からローマ帝国の版図に度々侵入した「蛮族」の略奪であった。豪華な温泉施設とその富が略奪や破壊の格好の対象となったのである。破壊されて最早用をなさなくなった廃墟は近隣の農民のための採石場と化した。またローマ帝国末期の社会的混乱によって帝国内の移動は次第に困難になり、交通路は荒廃した。こうしてガロ・ロマン時代の温泉町は忘却の中に沈み始め、中世が始まる。

2. 中世

ローマ帝国崩壊後にもキリスト教教会は以前と同じ理由から温泉療養を敵視した。つまり源泉の神秘的な治癒力に結びついた「異教」の神々の信仰を根絶するために、源泉そのものを埋めてしまうか、源泉のすぐ近くに教会や礼拝堂、修道院などのキリスト教の宗教施設を建設して、常に源泉を監視する態勢を作っていたのである¹⁰⁾。このような状況下では源泉の周囲に新たな温泉療養施設を建設したり近辺の環境整備を行うことは望めなかった。しかし変化は13世紀からゆっくりと始まった。契機は十字軍が持ち帰った東方の浴場の記憶であり、健康や衛生状態に関する実用的な医学の発展や大学の出現などであった。「このようにして1260年に聖王ルイはアクス・レ・テルムにラドル温泉を建設させ、パレスティナでライ病に罹患した兵士専用とした。聖職者はある種の温泉施設を地元の共同体や民間の地主に売ろうとしていた。15世紀には共同体が温泉管理に乗り出す。所有者（領主、共同体、個人）によって変わる施設への規制の多様性がその証拠である。温泉への関心は明白である。次第に温泉施設は新たな所有者の圧力のもとで組織化されてくる。雇用は増加し、同時に専門化する。規制は完全なものとなり、医学的な監視が導入される。諸外国の温泉地との比較から、フランスでのこの動きは例外ではないことがわかる」¹¹⁾。当時そうした温泉施設はバルネアリア *balnearia* という名称で呼ばれていたが、この名称はバニェール・ドゥ・ピゴールやバニェール・ドゥ・リュションなどのバニェール *Bagnère* という形で今日残っている。また、15世紀には温泉療養はヨーロッパ規模の広がりを見せながら発展した。ドイツとイタリアの温泉が特に好まれたが、特にスイスのバーデンが他の温泉町を圧倒していた。それは医学上の理由からではなく、当時バーデンはヨーロッパの社交界的な温泉町、娯楽と享楽を求める温泉町となり、健康で快樂を求める王侯や貴族たちがヨーロッパ中から集まってきたのである。本気で療養に来る病人は変わり者扱いされる世界の快樂の園とでも言うべき場所であった¹²⁾。

ルネサンス以降20世紀前半までの温泉療養

1. ルネサンス

古典古代への関心の復活によって特徴付けられる文化現象であるルネサンスにあって、古代ローマ文明に結びついていた温泉療養もまた復活流行したのは自然な流れであった。人文主義者や医師はかつてフランスにも大規模な温泉療養施設が存在していたことを想起させ、またラブレ（1494頃-1553）やモンテーニュ（1533-92）も温泉の効能を讃えた。特にモンテーニュは当時の汎ヨーロッパ的な温泉療養を代表する人物で、『エッセー』の中で「私は旅行のついでに、キリスト教国の有名な温泉はほとんど全部見て廻った」¹³⁾と述べているように、フランスからスイスやイタリアの代表的な温泉町を巡ったのであった。その行程が記されている『旅日記』¹⁴⁾には彼の滞在したプロンピエール、バーデン、アバノ、サンピエトロ、バッタリア、デラ・ヴィラ、ヴィニョーニ、さらには通りすがりの温泉など、有名無名の多くの温泉での入浴や鉱泉飲用が記されている。「モンテーニュは45歳から胆汁性ないし尿砂性の結石症に冒されていて、温泉治療を非常に重視していた。当時の情報に照らして彼は妥当な観察を温泉治療について行っている。それぞれの温泉を訪れるたびに彼は細心の注意で様々な治療の仕方を書き留めている。水や湯や湯気を立てているような鉱泉水に対する彼の分類は現代のものに近い。彼はにおいや味、透明性などを注意深く記している。初めてモンテーニュは温泉治療において身体の器官の変質を招く主要な禁忌の一つを述べた。要するに彼は炯眼の観察者であるとともに天才的な先駆者となったのである」¹⁵⁾。また16世紀には温泉療養は王室や貴族、貴顕の関心も呼び、彼らの温泉町への滞在が始まるが、これは19世紀の第二帝政末期まで温泉療養に大きな影響を与え、時として温泉町の発展の決定的な契機となった。たとえばマルグリット・ダングレーム（1492-1549。フランソワ一世の姉でナヴァール王妃）はコートウレを選び（彼女の『エプタメロン』のなかで描かれている）、アンリ二世（1519-59、在位1547-59）はオー・ボーヌとプーグ・レゾーで療養し、カトリーヌ・ドゥ・メデシス（1519-89。アンリ二世妃）はブルボン・ランスイで療養し（1542年）、アンリ三世（1551-89、在位1574-89）もまたブルボン・ランスイやプーグ・レゾーに滞在した。ブルボン朝¹⁶⁾の創始者アンリ四世（1553-1610、在位1589-1610）については当然故郷のピレネーの温泉を好み、オー・ボーヌとオー・シヨードに出かけた。

2. アンシャン・レジーム

アンリ四世の治世下で国家による最初の温泉政策が実施された。国王自身、オー・ボーヌやオー・シヨード以外にも、エクス・レ・バンやバルボタン、ユージェニー・レ・バン、プーグ・レゾーなど多くの温泉地に滞在したとされているが、1605年5月にはフランス王国温泉鉱泉総監督官職 *Surintendance des bains et des fontaines minérales du royaume* を設置し、温泉鉱泉総監督官を任命した¹⁷⁾。これは形を変えながらも19世紀末まで存続した「温泉監督医」 *médecin inspecteur* 制度の源であった。この総監督官は地方ごとに監督官を任命して温泉の管理に当たさせた。この総監督官の職責は結局王の首席侍医ラ・リヴィエールが負うこととなり、これ以後、王の首席侍医はフランス王国の温泉を支配することとなり、各温泉の監督官に自分の弟子などを任命した。「こうした活動によってフランス王国は『温泉問題担当』の行政機関を備えたことになる。このような温泉の公認は温泉療

養に対する国家の増大する関心の現れである。温泉監督官の任務は重要であった。監督官は源泉を発見し、特性を検査し、それらを保護し、温泉施設の良い運営を監視するという役目を負っていた¹⁸⁾。総監督官職は以後、ルイ十三世(1601-43、在位1610-43)時代にはブヴァール、ルイ十四世(1638-1715、在位1643-1715)時代にはダカン、次いでファゴンに引き継がれた。鉱水の効能についての医学的文献は増加し、各温泉は特有の効能を掲げるようになった。そうした効能を宣伝することが温泉の成功につながったのである。だがそうした文献の医学的信頼性は化学分析技術が不十分であったために当然のことながら低かった。温泉ごとの真の適応症の発見もなければ、一日に30杯以上も鉱水を飲用するなどと言う無茶もまかり通っていたのである。したがってルイ十四世は1709年にファゴンに命じて各温泉町ごとに温泉管理官と源泉の管理を行うスタッフを任命させた。しかし王やその重臣が度々温泉に滞在するようになると、「パリのよう大都市や宮廷では湯治に行くことは以後、品のよいこととなった¹⁹⁾。模倣という同調圧力が働くのは近代に限ったことではない。むしろこの時代のような宮廷社会では凝縮した形でそれが見られたというべきであろう。

当時の温泉滞在者は距離と階級に応じている。つまり交通事情が相変わらず悪かったので遠方からの来訪はそれ自体非常に費用がかさみ骨の折れる仕事でもあった。従ってそれをいとわずにやってくる貴族や王族は少数で、多くが近辺の貴族やブルジョワ、現地住民で、貧窮者も多かった。というのも多くの温泉町には貧窮者専用の施療院や温泉療養施設があり、温泉管理官は彼らを無料で療養させる義務をも負っていたからである。この時代の温泉療養者の中で最も有名なのはセヴィニエ夫人(1626-1696)である。魅力的な書簡を精力的に書き送ったこの侯爵夫人は、自分自身の温泉療養(50歳を過ぎて罹ったリューマチの治療のため1672年と翌年にはヴィシーに、次いで1687年にはブルボン・ラルシャンボに滞在した)についても滞在先から娘のグリニャン夫人や知人に宛てて、鉱泉水の飲用や熱湯のシャワーなどの責め苦以外に、同様に滞在していた知人たちとの社交生活も伝えている。当時の温泉療養者の一日はたとえば1656年のフォルジュ・レゾーでは「遅くとも六時に起床。泉に向かう。鉱泉水を飲みながら散歩をする。大勢の人々がいる。お互いに話しかける。カプチン会修道院の庭園まで散歩に行くが、そこではあらゆる人々に出会える。ミサに出て、衣服を替えるために戻る。午前にはラティネと毛皮、昼食の後はタフタ(昼食は正午に摂る)。人々は訪問しあったり、ルーアンからやってきた劇団のコメディエを観たりする。6時に夕食。再びカプチン会修道院まで散歩。9時に就寝²⁰⁾という日常であった。一般的にいて主として午前になされる治療(鉱泉飲用は一日三回ほどに分けて行われたが、入浴やシャワーなどは午前中に行われた)、散歩、静かな時間を利用したの読書、観劇、社交などの主な要素は存続した。

当時ある程度以上の階級は温泉地の個人の家滞に滞在した。ホテルに相当する施設は未だ存在せず、施設設備の劣った旅籠にブルジョワなど普通の人々が宿泊した。しかし空部屋が少ないことや温泉施設(大抵は17世紀初頭の建築)の狭さ、不便な交通などという悪条件を考えると、ブルボン・ラルシャンボ、ヴィシー、フォルジュ・レゾー、プーグ・レゾーなど最も有名な温泉町でもこの当時は一シーズンにせいぜい数百人、例外的に二三千人しか受け入れられなかったと思われる。どう考えてもそれらは村の段階であり、町の段階に達するのは19世紀後半の第二帝政時代を待たねばならなかった。しかし未だに生産中心の経済の中であって「初期の農村の保養地が、大部分の普通の都市がかつて長いこと経験したことのなかった消費経済に捧げられた特殊な都市生活様式のショーウィンドウになるのに時間はかからなかった²¹⁾。この時

代の有名な温泉町というと、ゼヴィニエ夫人の滞在したヴィシーやブルボン・ラルシャンボ、特に1633年のシーズンにはルイ十三世やアーヌ・ドートリッシュ（1601-66、ルイ十三世妃）、リシュリユーなどをふくめて宮廷がほとんど引っ越したような壮観を呈したフォルジュ・レゾー、バニェール・ドゥ・ピゴールやバレージュ（当時5歳のメヌ公爵（1670-1736、ルイ十四世の子）が療養した）のようなピレネーの温泉町も大きな成功を収めた。

アンシャン・レジーム下での温泉町の概数は1650年の60から1785年の100へと増加している。また、革命前、リストアップされた源泉の数は1,000以上に上った²²）。20ほどの温泉町が成功を収めたが、その理由はそれらの温泉の優れた治癒能力が広く知られたからではなくて、王族や君主の来訪があったからである。こうした君主や王族の広告塔としての威力は20世紀初頭まで非常に強く感じられた。18世紀にはいると彼ら以外にも、たとえばヴォルテール（1694-1778）の来訪で名前をあげたプロンピエールや、ディドロ（1713-84）の滞在で名を高めたブルボヌ・レ・バンなど、才人が温泉町の名声確立に寄与することもあったが、なんと言っても王族や君主を迎える榮譽に浴した温泉町がそのために環境美化作業やインフラ整備（都市計画の萌芽）を行ったのであり、そのようにしてヴィシーは1785年に、プロンピエールは1761年と1762年の二回、ルイ十五世（1710-74、在位1715-74）の二人の娘、アデライド・ドゥ・フランスとヴィクトワール・ドゥ・フランスが滞在したことにより温泉療養地としての名声を確立し、整備事業を行ったのであった。とはいえそうした整備事業の財源は、多くの場合国頼みであるのは当時も現在も変わらない（たとえば1697年にサンタマン・レ・バンでルイ十四世はヴォーバンに命じて新たな施設を建設させたし、ルイ十五世の侍医であるローランの指導のもとでカストゥラ・ヴェルデュザンで源泉からの取水や温泉施設の建設への補助がなされたのであった）。当時誕生しつつあった商業的・産業的資本主義はこうした投資には無関心であったが、温泉町の改善に努力した地方長官も存在した（たとえばオークの地方長官エティニイは1760年からリュションでテオフィル・ドゥ・ボルドー医師（1722-1776、鉱泉水の近代的な温泉医学的研究を築いた一人）とリシュリユー元帥（1763年に療養にやってきた）の主導で行われた改修作業に補助を行った²³）。

18世紀後半にはフランスの温泉療養に明らかな進歩が見られた。療養者数は多くの温泉町で増加し、ホテルの名に値する大きく比較的快適な宿泊施設が建設され、以後ある程度の階級の間はそこに滞在するようになった。また病院の建設が増加し、たとえばプロンピエールではポーランド王スタニスワフ一世（1677-1766、在位1704-09および1733-36）が1740年から1766年にかけて病院建設とその周囲の整備という慈善事業を行ってこの温泉村の美化に貢献したし²⁴）、また1727年以降、ブルボヌやバレージュでは軍病院が改善され、18世紀を通じてその成功は確かなものになった。このように軍人は優先して温泉の恩恵に与ったのである、ちょうどガロ・ロマン時代のように。

また18世紀を通して鉱泉治療学の知識は物理や化学の発展によって確かな基礎をもつようになり、国家的な規制も漸進的に進展していった。「1772年4月25日、王の宣言に従って『王立医学委員会』が設立された。この委員会の三人のメンバーは『すでに知られているすべての温泉を、鉱泉水の総合検査官の資格で監視し、新たな温泉を発見するために必要な調査を行い、温泉の効能と特性を決定するためにその分析を行い、委員会に報告した後に、そしてすべてが検査され証明された後に公衆にその結果を公表する』任務を負っていた」²⁵）。またこの権限の中には輸送して販売される鉱水の監視も含まれていた。鉱水の輸送販売は17世紀初めから見られ、増加傾向だっ

たが同時に多くの不正が増加したので、輸送者は鉱水の原産地証明を所持するとか、瓶は現地当局や鉱水管理官によって封印されねばならないなど、無秩序状態を規制する措置が取られていた。

3. フランス革命から7月王政まで（1789-1848）

フランス革命の混乱によって君主や王族、貴族の来訪が止んだので温泉町の発展にとっては打撃であった。しかし恐怖政治の最中にもその発展が完全に中断されるということとはなかったものの、当局は反革命分子が温泉町に潜むのを恐れ、ホテルや宿屋に宿泊者のリスト提出を義務づけた。また共和制への移行に伴って、アンシャン・レジームから受け継がれた組織は大きな変化を被った。王の主席侍医制度廃止はそれに付随していた鉱水総監督官職の廃止をも意味したが、総裁政府はそれに代わって同じような任務と権限を有する温泉監督医 *médecin inspecteur des eaux* 制度を設立し、温泉監督医は以後19世紀の末に至るまで絶大な権限を行使した。代表的な例は1801年から1833年までヴィシーで温泉監督医を勤めたリュカ男爵（1768-1833）であり、彼は復古王政下でヴィシーの首長も兼ねた。ヴィシーは彼にとって一種の巨大温泉病院であり、彼はその主席医師であり、行政官であり、いわば所有者でもあった²⁶⁾。総裁政府は革命歴第六年のヴァンデミエール23日の布告において鉱泉の公共財たることを宣言したが²⁷⁾、革命の混乱の中での温泉地の所有権は政府による没収や買い戻し、委託などの運命を辿った。たとえばディーニュの温泉は共同体から個人が買い戻したが、その反対にコートウレやサンタマン・レゾーでは温泉が周辺の共同体に委託された。バン・レ・バンでは革命前の領主が所有していた温泉は没収されて、個人に売却された。

第一帝政（1804-1815）と復古王政（1815-1830）のもとでは温泉療養には再び人が戻り始めた。やはり温泉町の発展の鍵は君主やその一族、貴族や文学者、才人たちが訪れることにあったのであり、その後には模倣の同調圧力によって裕福な階級が続いた。たとえばボナパルト一族についてみると、ナポレオン一世（1769-1821、在位1804-15）は多忙で温泉町に逗留する暇はなかったとしても、母親のレティツィアはヴィシーやエクス・レ・バンで、弟のオランダ王ルイもヴィシーやバレージュで療養し、妹のポーリーヌはエクス・レ・バンのカジノで財産を蕩尽し、皇后のジョゼフィーヌもエクス・レ・バンやブロンビエールで温泉療養をした。弟ルイの後オルタンスはピレネーの温泉を好んだが、エクス・レ・バンにも滞在した²⁸⁾。カジノは1806年6月24日の勅令によってシーズン中に限って温泉地でギャンブルが許可された結果誕生した。カジノが温泉リゾートにとってかなりの収入源となるのは特に20世紀初頭のことなのではあるが、この突破口は重要である。とはいえ19世紀前半のこの時期にはカジノよりも読書室やビリヤード場、喫煙室やサロンなどが療養者を集め、そこでは音楽を聴いたり、劇の上演を見たりすることが出来たのである。

1820年12月に王立医学アカデミー *Académie royale de Médecine* が設立されたが（王立医学委員会は革命期に廃止されていた）、このアカデミーはたとえば新たな源泉のいかなる開発にも必要な予備許可の検査と交付のような重要な権限を手中にしていた。また1823年6月18日付の勅令は鉱泉管理の規則を定め、知事に温泉監督医が温泉療養施設の中で遵守すべき規則を定める役割を負わせた。しかし全体として第一帝政と復古王政の時代の温泉療養はそれ以前と大きく変化したというわけではない。幾つかの勅令や制度の改編は18世紀末に行われていた規制を大幅に逸脱したものである。革命の激変を経て各温泉町の療養者数は増加し（全体数はまだ

絶対的に少ないものであったが)、療養者の身分構成も革命前に似通ってきた。

各温泉町はそうした療養者の増加傾向に励まされて温泉施設の改修や建設を促進し、エクス・レ・バン、バニェール・ドゥ・ビゴール、アンギャン、グレウー・レ・バン、リュション、モリトゥ、ヴィシーなど有名な温泉町は温泉の医学的側面(個人用のシャワー室と治療室はますます利用が多くなり、温泉治療施設はもっと洗練されてきた)とともに町の都市計画的な側面(療養者をくつろがせるための空間という考えが発展し、サロンや喫煙室、遊戯室やその他の社交のための場所が増加して、ある種の社交生活を送っている常連客の要望に応えた)を重視するようになった。こうして温泉町は、単に源泉を利用して医学的療法を行うだけではなくて、温泉治療施設や療養者に対して最良の空間と最大の快適さを与えることによって、完全な生活の場所としてのリゾートを作り出す方向に向かっていった。つまり都市計画への意志がパリ以外で温泉町において明確に示されたのである。「自分たちの生活を可能にする産業や収益性への気遣いなどと切り離されたこうした保養の中心地、いまだ生産に取り憑かれた時代にあってますます消費に捧げられていったリゾート」²⁹⁾としての「温泉地は国土整備と都市計画の道を辿っていた。建築家はパリと同じように温泉町で鋼鉄、セラミックス、化粧漆喰、ガラスなどの新材料を使って建築を行った。公的であると共に私的な内部の整備では、割り形や掛け布、タピスリー、椅子張りなどのほこりを立てやすいものは排除され、流行の色となった白が幅を利かした」³⁰⁾。またこうした意志に沿って、療養者がゆっくりと散歩したり他の療養者と交流できる遊歩道や並木道の整備も行われた。温泉町は都市の汚染とは無関係の清浄な空気と水と光を特徴とし、療養者は新鮮で体によい空気や気候の恩恵を充分にうけながら、都会の雑踏を離れてしかも都会と同じような社交生活を温泉町で送ることができたのであった。「19世紀には『治療の言説』が優勢であった。当時、進歩とかが衛生とかが強力な思想であった。こうした概念は一般的な射程、普遍的な価値を、その起源において社交的な性格をもち独創的な人々の習慣でしかなかったものに与えた。ニースやカンヌにおける冬の長逗留と同じく、バースやスパーにおける温泉療養もまたそうであった」³¹⁾。また「温泉が持つとされていた医療的な効能(これによって旅行と療養、つまり数週間の滞在が堂々で行えるようになった)を越えて、温泉地もまた急速にレジャーの中心地となった。保養地での主要活動は(一つではないとしても)宿泊やサーヴィスや気晴らしを相変わらず増え続ける客に与えることであった」³²⁾。このような背景において初期のホテル施設が建設された。こうしてバニェールやバニョール・ドゥ・ロールヌ、バラリュック、バルボタン、ブリド・レ・バン、カンボ・レ・バン、カブヴェルヌ・レ・バン、コートウレ、シャテルギュイヨン、エヴィアン、フォルジュ・レゾー、ラマル、サン・ジェルヴェ・ルフアエ、サン・ネクテール、ユリナージュ、ヴァル・レ・バンなどで温泉施設の建設や再建が進捗し、町の美化や環境整備が行われた。しかし多くの温泉町は財源不足から温泉治療施設の充実だけを目指さざるを得なかった。またそうした費用負担に耐えきれずに温泉経営を放棄するコミュニヌも出現した(たとえばサンタマン・レ・バンは1812年から1830年まで温泉開発が中断された)。

1830年の7月革命以後の7月王政時代には小さな変化がほの見えてきた。相変わらず君主を頂点とする貴顕の来訪が温泉町の名声に大きな役割を果たしていたが(たとえば1840年にバン・スュル・テクというピレネゾリヤンタル県のある小さな温泉町はルイ・フィリップ王(1773-1850、在位1830-48)の後アメリを迎えたのを機会にアメリ・レ・バンと改名したが、この改名はこの温泉町の名声に貢献した)、彼らの来訪のあるなしに関わらず1840年以降、特に1845年以降に多くの温泉町で温泉療養者の大幅な増加が見られた。もはや各温泉町あたり数百人単位ではなく、数千

人単位の規模で温泉療養者が滞在するようになったのである。これは温泉町の新たな時代を告げる予兆であった。このような発展ぶりは7月王政時代の二人の大臣アドルフ・ティエール（1797-1877、政治家、第三共和政初代大統領）とキュナン・グリデーヌの関心を惹いた（彼らは二人ともヴィシーの常連で、この温泉町の繁栄を目の当たりにしていた）。行政が温泉町の可能性に気づいたのである。19世紀の産業革命の結果である科学技術や経済、社会の発展が温泉療養のめざましい発展を可能にしたのだが、こうした変化がはっきり現れるのは第二帝政時代になってからであった。

4. 第二帝政（1852-1870）

フランスの温泉療養は第二帝政時代に一つの頂点を迎える。それは現在にまで残る「温泉町」の華やかで危なげなイメージを固定化した。1850年（この年フランスの人口は3563万人であった）³³⁾から1870年まで温泉療養者の数は三倍となり、付き添いの数を療養者と同数とすると両者の数は30万人に近づいた。そして第二帝政末期にはすでにその規模は第一次世界大戦前夜（温泉療養リゾート全体では80万人の来訪者、総人口は3,900万近く）と同等になっていたほどである。このような発展には効率的な規制の努力、全体的な富裕化、輸送機関の発達、観光案内書の変化、温泉療養医学の進歩、資本の関心など幾つかの要因が考えられるが、いずれもこの時代にはっきりと姿を現した産業や技術の進歩に負っている³⁴⁾。

鉱泉を巡る規制は1605年のアンリ四世による鉱水総監督制度の設置以来、国家の関心の一部となってきたが、規制あるいは保護の原則は、土地の所有者は地下の所有者でもあるということ、自然に、あるいはボーリングなどによって湧出している源泉はその土地の所有者のものである、ということである。しかし治療用のためのミネラル・ウォーターの輸送と販売については許可を得ねばならなかった。アンシャン・レジームでは鉱水の監視は王の主席侍医と王立医学委員会が共同して当たり、総裁政府と第一帝政では開発の事前許可制がとられ、復古王政時代の1823年6月18日の勅令においても内務省による事前許可制の徹底が図られた。このように消費者は保護されていたが、所有者は全然そうではなかった。同じ地下水系に属する鉱泉があちこちに湧出した場合、各湧出地点での土地所有者が違えば、法制上は何ら規制が及ばなかった。実際に1840年以降には手当たり次第のボーリングによって既存の源泉が枯れたり湧出量が減少したりする被害が相次いだ。枯渇にいたらないまでも既存の源泉の隣での新たな源泉の調査と発見は争いのもととなった³⁵⁾。ところで源泉所有者にとって幸運なことに、国家もまた鉱泉を所有していた。というのもブルボン元帥の財産没収によって国家はヴィシー、ネリス、ブルボン・ラルシャンボの源泉の所有権を手に入れていたのである。また国は1811年にプロンビエールを、1853年にリュクスイユを、1860年にエクス・レ・バンを買収していた。したがって国もまた野放しのボーリングによって自分の所有する源泉が脅かされていたのである。従って1848年3月8日臨時政府が「鉱泉保護令」を出した。その令には「(...

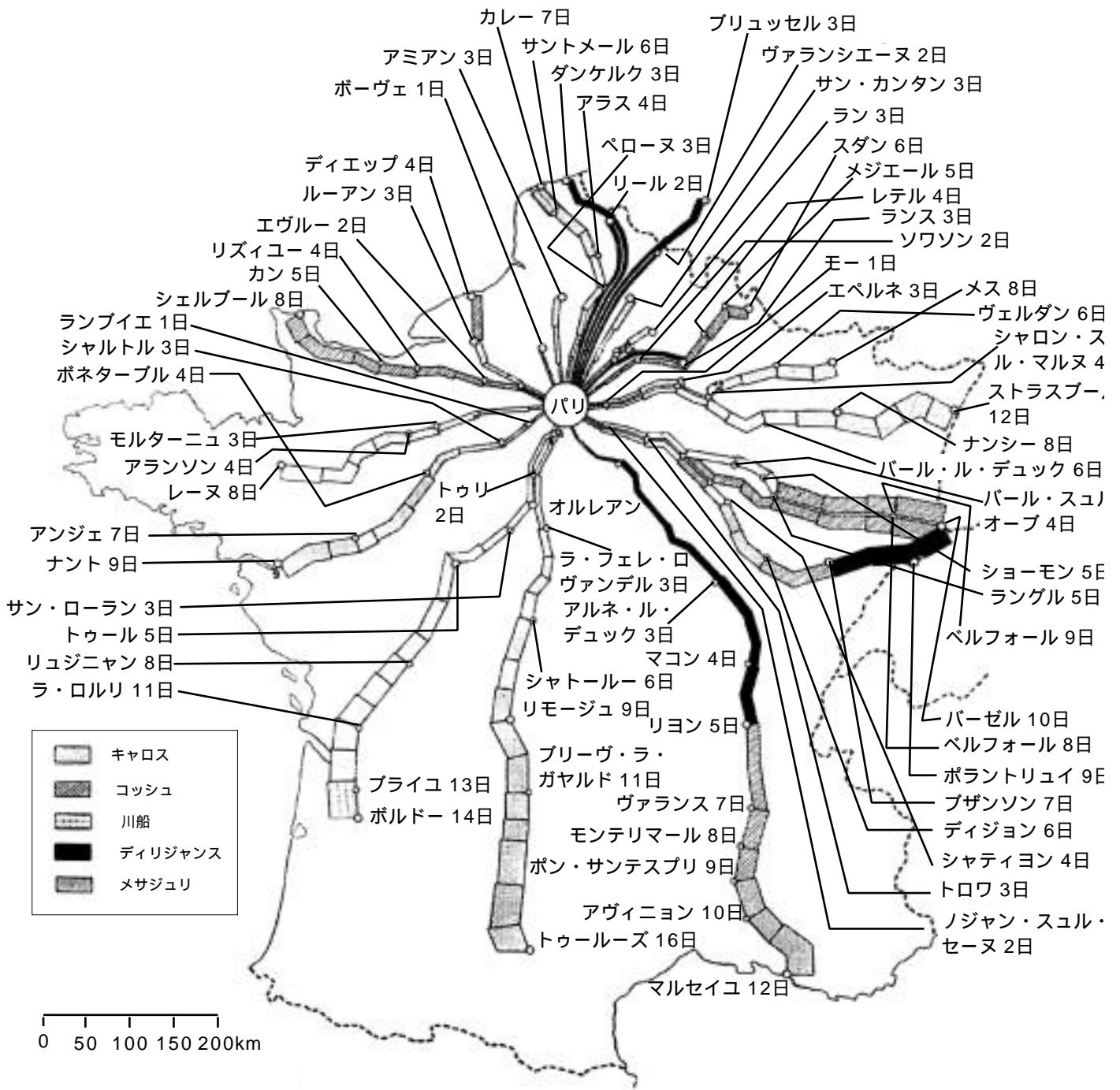
) 鉱泉水の源泉は公共の財産であり、その保護は人間にとってと同様国益にとっても重要である以上、そしてこうした施設の存在を危険にさらしうる試みを前もって知らせることが望ましく、また緊急時に備えるために、いかなるボーリングや地下での作業も、その利用が常に許可されるであろう鉱泉水の各源泉から少なくとも1,000メートルの半径内においては、県知事の事前許可を得なければ実施しえないであろう」³⁶⁾。

このように保護区域という新たな考えが現れたのだが、実際問題半径1キロという

のは、鉱泉の地下層がそれ以上に拡がっているために多くの場合不十分であった。しかし治療効能の全くない温泉や放棄された温泉を含むすべての源泉に、それ以上に保護区域を拡大することは実際上できない。そこで出てくるのが「公益」という考えで、これは「鉱水の源泉の整備と保護に関する1856年7月14日法」の基本方針であった。この法律は幾多の修正を受けながら1914年まで温泉規制の基本法として機能していた。保護区域の半径は必要に応じて変更された。公益を認められた源泉の周囲では厳しい保護措置が取られたのと同時に、所有者といえども国の事前許可なくしてはいかなる整備事業も行えなくなった。さらに源泉の管理が杜撰だったり公益に叶っていなかったりした場合には源泉の収用の可能性も存在した。この可能性は重要で、このために自由に源泉整備を行おうとする所有者の中には、単に源泉の開発許可を得るにとどめて、公益性認可の申請を見送るものも現れた。さらに「1860年1月28日付の政令は、すでに1823年の勅令によって定められていた多くの措置を受けて、鉱泉水の衛生状態の統制を定めた。利用されている源泉の位置するあらゆる場所は施設の機能と監視の役目を負った温泉監督医によって監督されねばならないことになった。ますます明確になっていくこうした組織は温泉の利用を合理化する以外の目的を持っていなかった」³⁷⁾。

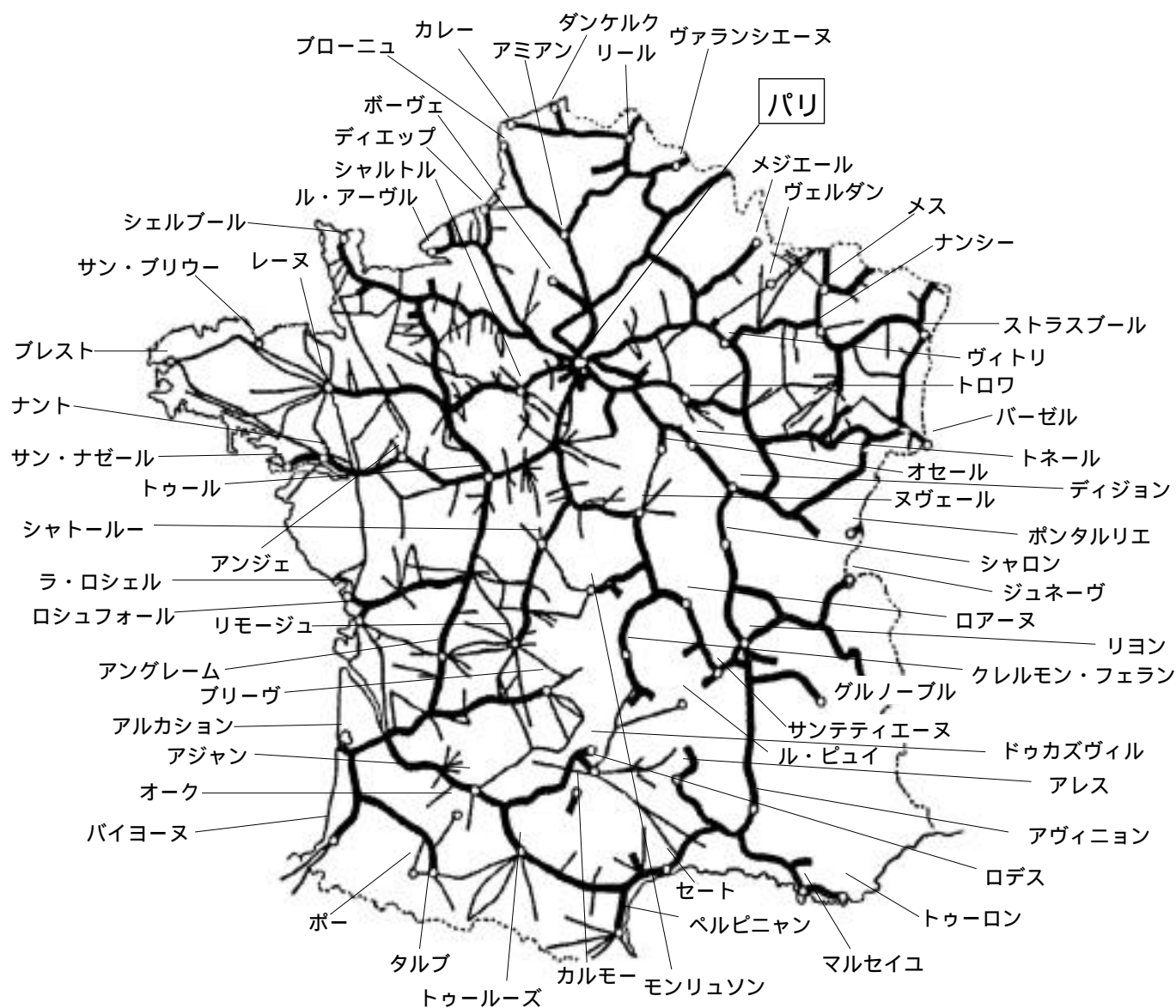
このような背景において、温泉町への来訪者の身分構成は1845年頃まではまだ土地所有者が優位を占めていたが、第二帝政以後は「金利生活者」（事業から引退した「退職者」としての金利生活者と、一度も職業に就かない遺産などによる金利生活者）が数を増し、次いで卸売商、自由業（公証人、弁護士など）、高級公務員などが続いた。これらの新たな客層の出現によって、温泉町は繁栄に向かった。しかし温泉療養を行う資力を持つという個人的な条件だけでは不十分で、交通路などのインフラ整備が大勢の移動には欠かせなかったが、この時代ペレール兄弟やロスチャイルド家を始めとして資本家が競って行った鉄道投資のために、以前とは比較にならないほど温泉町への往来が容易となった。鉄道による交通・社会革命は強調してもしすぎるということはない。「鉄道は、十九世紀において、社会変化の最も有力な道具であった。その出現は、自由時間の使い方を、反論の余地のないほどに変革した。交通に大きな異変をもたらしたその他の改革と結びついて、鉄道は、次のような考えのもととなった。それによれば、社会制度としてのヴァカンスは、長い旅に出るということを意味していた。長旅は、ヴァカンスに組み込まれた一部分 - おそらくは本質そのもの - となった」³⁸⁾ というイギリスについて書かれた文章はそっくりフランスにも当てはまるのである。鉄道の出現によって移動条件は徒歩や馬車という古代的状况から中世を飛び越えて一気に近代に移行した。図1はアンシャン・レジーム末期のパリと各都市を連絡する所要日数であるが、このような状況は19世紀中葉には図2のように全国的な鉄道網の整備によって、飛躍的な改善を見たのである。

図1 パリと主要都市間の移動所要日数（1765年）



原図は François Caron, *Histoire des chemins de fer en France 1740-1883*, Fayard, 1997. による。

図2 第二帝政中期の鉄道網（1860年）



原図はFrançois Caron, *Histoire des chemins de fer en France 1740-1883*, Fayard, 1997. による。

大都市間の移動でもそれまではガロ・ロマン時代と大して変わらない所要日数で、たとえば「かつてはパリとリヨンの間の436キロの距離を踏破するには100時間が必要であった。鉄道によって以後は10時間で充分となった」³⁹⁾という状況のなか、確かに温泉町はピレネーや中央山岳地帯を想起するまでもなく、大都市から離れた遠隔の地に位置するものが多く、鉄道の幹線からも離れていたのが最寄り駅から馬車や船でさらに行程を必要としたが、それも徐々に温泉町への支線の建設によって解消されていった。「大きな障害の一つは、しばしば山塊の中に位置し、近づき難かった温泉町への移動手段であった。鉄道敷設と温泉町を結ぶ路線の建設は間違いなく皇帝の努力の延長上に位置するものである」⁴⁰⁾。たとえばダックスには1854年、ル・ヴェルネには1858年、ブロンビエールには1860年、ヴィシーには1862年にそれぞれ

支線が連絡した。ワゴン・リ会社は1884年から「オリエント・エクスプレス」に代表される豪華列車の運行を始め、温泉町へも「ピレネー・エクスプレス」とか「ヴィシー・エクスプレス」などを送った。鉄道による周遊も盛んに宣伝され、温泉町に関しても、たとえばパリ・オルレアン鉄道はヴィシーからル・モン・ドールに至る「温泉巡りルート」を喧伝した⁴¹⁾。この時代、鉄道開通は温泉町にとって一大イベントで、ラ・ブルブルヤル・モン・ドール、シャテルギュイヨン（とはいえこの町の鉄道開通は1912年だったが）など多くの温泉町がそれを長い間待ち望んだが、多くの小さな温泉町は狭軌の地方線でしか連絡されなかった。駅さえ持たない温泉町も多かった。しかし次第に増加してくる自動車がこうした交通の不便さを補うまで、つまり両大戦間まで、鉄道に連絡していないということは大きなハンディキャップとなった。

このように次第に往来が比較的容易になると、次に問題になったのは温泉町⁴²⁾自体の宿泊収容力の少なさであったが、この面でも1850年から1914年にかけて温泉町でのホテルの発展はめざましく、貸部屋やアパートの家主はホテル経営者へと進化し、宿屋は豪華ホテルへと変貌を遂げた。17世紀と18世紀に大流行した古くからの温泉町では、住民が湯治にやってきた貴人を自宅に宿泊させ、かなりの副収入を得ていたが、19世紀初めにはそうした家主たちは家を増築したり、今ならホテルと呼ぶような別棟を建てた⁴³⁾。しかし1860年以降に温泉町が近代的温泉療養リゾートに発展するのに伴って、そうした宿泊施設では不充分となったのでしばしば外部資本が客室数のもっと多い（100、あるいはそれ以上）、より快適なホテルを建て始めた。相変わらず客室へのトイレや浴室の設置などは考えられもしなかったが、客が多くの時間を過ごす食堂やサロンは入念にしつらえられていた⁴⁴⁾。当時は「贅沢」と「快適さ」は必ずしも相補的な概念ではなかった。1880年頃から多くの温泉町でもっと専門的な新しいタイプのホテルが建設され、特に1890年から1895年以降は浴室やトイレといった給排水設備が非常に進歩した。古いホテルも改革を迫られた。

鉄道と同様、観光ガイドブックは温泉町の発展において無視し得ぬ役割を演じた。1835年頃から医師の執筆による携帯に便利なガイドが出始めた。その中でも人気のあったのは1850年以降アシェット書店から出されたアドルフ・ジョアーヌの「鉄道文庫」であり、『パリ-ポルドー』、『パリ-ナント』、『ヨーロッパの温泉』など旅程別のシリーズに引き続いて、すぐに主要温泉町別のシリーズも出された。他の出版社も温泉町のガイドに力を入れたが、その内容はますますホテルや鉄道の宣伝に堕したものとなっていった。結局多くの温泉町において療養者のためのガイドブックはその地方の出版社が出し、著者はその温泉医ということになった。こうしたガイドの読者（前述のように新興の客層である）にとって少なくとも1880年頃まで、温泉町に湯治に行くということは、初めて列車に乗るということを意味した。したがって特に病人のために最新式の列車の乗り方の解説や沿線の風景、途中駅の町などが念入りに記述された。ガイドブックの一般情報に充てられた章ではホテルや家具付きアパート類のリスト、温泉町で開業している医師のリスト、温泉施設の規則と料金、カジノの予約方法、乗合馬車の料金、主なエクスカーシオンなどの正確な情報がふんだんに記載されていた。

温泉療法の技術でも、1850年以降急速な進歩が見られたが、これは当然、物理や化学の進歩と結びついていた。この分野で新たな発見があるとすぐさま温泉医学に応用された新説が現れるという具合である。温泉療法と温泉町について書かれた一般的な著作は1840年以降に多く出版されたが、有名なものとしてはアリベールやパティスイエ、デュラン・ファルデル、コンスタンタン・ジャムなどの著作がある。

温泉町にも大きな変化が起こったが、それは温泉監督医（1840年以降は大きな温

泉町では一人か二人の副監督医の補助を受けていた)以外に何人かの医師が温泉町でシーズンに開業したことである。1875年以来、繁栄している温泉町で開業することが流行となる。医師にとってはシーズン中だけ集中して働けばかなりの収入になる温泉医は魅力であった。温泉医の数は1870年から1914年の間にシャテルギュイヨンでは3人から17人へ、ヴィッテルでは3人から15人へ、エヴィアンでは6人から15人へ、ル・モン・ドールでは8人から23人へ、エクス・レ・バンでは18人から28人へ、リュションでは15人から20人へとそれぞれ増加した。ヴィシーに至っては第二帝政末期で20人、1890年には50人、1914年には100人ほどの温泉医が開業していた。1913年には100カ所の温泉療養リゾートで総計700名の温泉医が開業していたという(当時フランスにはおよそ2万5,000人の医師が存在した)。この現象は温泉町が有望だからこそであった⁴⁵⁾。こうした温泉医の増加によって1853年には南フランス鉱泉医学協会とパリ鉱泉医学協会という専門家の学会が設立された。1858年には温泉療法のみに関係する定期刊行紙『温泉新報』が創設され、1914年まで存続した。またこの時代、一般医も患者の希望する温泉町に滞在できるような処方を書いた。このような温泉療養への嗜好は、冬が終わり春が来ると各温泉リゾートなどに散らばる社交界の慣習に関係していた。温泉町に娯楽を求める客と健康を気遣う客、この二種類の客の共存が常に大きな温泉療養リゾートでは見られたのである⁴⁶⁾。

19世紀後半の温泉町の歴史の中で大きな特徴の一つは、資本の介入が見られたということであった。「温泉町の第二の発展要因は、たとえ温泉治療施設の維持と競争によって収益性が減じられるとしても、温泉療養が投資家に引き起こした関心に結びついている。こうしてパニヨール・ドウ・ロールヌやバラリュック(この源泉は1868年以来イギリスの会社によって管理されていた)、ブルボン・ランスイ、コートウレ、ダックス、アンギャン、プーグ・レゾー、ラ・プレストなどに多くの温泉開発会社が誕生したが、その存続期間はまちまちであった」⁴⁷⁾。特に1860年以降に実業界は温泉療養が未開拓の興味ある分野であることに気づいた。したがって資本家は温泉町での投資をはじめようになる。この現象の規模はたぶん今日では過大評価されている。というのも多くの源泉の中でも最も有名なものは国家や県やコミューヌ、慈善病院などの所有となっていたものが多かったからである。しかし、「奇体なところだ、温泉町ってのは。地上にいまもなお残っている唯一のおとぎの国だねえ！二カ月のうちに世界のほかの部分で十カ月のあいだに起こるよりも多くの事件がもちあがるんだからな。実際、温泉ってやつは、鉱物質をふくんでるんじゃないやなくて、まるで魔術的な力をそなえているみたいだよ」⁴⁸⁾という魅力に取り憑かれて、埋もれていた温泉町を売り出したり新たな源泉の発見・開発を目指す「温泉投資ブーム」が1875年から1890年の間に起こった。結局、温泉治療施設はあまり収益性がなく維持に莫大な費用がかかるので、鉱泉開発から引き出せる利益は、ミネラル・ウォーターをフランス内外で販売できなければ大きなものにはならない。だがこの古くからあるミネラル・ウォーター販売はなかなか発展しなかった。大ホテルはデビューしたばかりであった。残りはカジノでのギャンブルであるが、これこそが最も興味を引く利益の源であった。

またこの時代はルネサンス以来続く温泉療養の汎ヨーロッパ性という特徴が最後の輝きを放った時代でもあった。国際的にはドイツの温泉町、特にバーデン・バーデンの人気は絶大なものとなった。そこではカジノが大々的に運営され多くの療養者や付き添い、その他様々な階層の人々を引きつけていたので、そこに姿を見せるのが上品だと思われていた。フランス人に関してはティエール、ミニエ、エミール・ドウ・ジラルダン、ドゥラクロワ、ギュスターヴ・ドレ、ベルリオーズ、オッフエンバック、アランベルク大公、ロスチャイルド男爵、サガン大公妃、カスティリオーネ、フロー

ベール、マクシム・デュ・カン（バーデン・バーデンで1894年になくなった）などが滞在し、まさに世界の夏の首都の観を呈した。ようやく1855年以降、しかも控えめで魅力に乏しいカジノしか持たなかったフランスの温泉町がこのようなドイツの温泉町に対抗するのは困難であった。伝統的にフランスの温泉町では温泉治療施設の中にサロンが存在し、そこで喜劇やコンサートや舞踏会が催され、またトランプのようなある種の遊びも行われていたが、時代はそれだけでは不十分という判断を下した。しかしドイツの温泉町を模倣するかどうかについては意見が分かれた⁴⁹⁾。

またこの時代には温泉町の売り出しにあたって「広告戦略」が重要となってくる。依然として王侯の来訪は大きな宣伝の要素であったが、それ以外にたとえば文学者やジャーナリストや医師たちをほとんど無料で招待して大盤振る舞いに及び、彼らの筆や影響力を通して多くの新聞雑誌に提灯記事を書かせるという「下品な」方法が実行されたが、この手本はすでにドイツにあった。「温泉地はまた比較的最近の産業、つまり広告に興味深い可能性を与えた。1863年にブルミエ⁵⁰⁾がデラックスホテルの中の一つを落成したとき、彼はパリの40人の医師たちと同じく首都のジャーナリズムの様々な代表者たちを旅費持ちで招待し、丁重にもてなした。公告と広報は温泉リゾートの予算の基本的な項目となった。大部分の温泉リゾートはパリのジャーナリズムの記事によって売り出されるか、金銭ずくの小冊子（『ル・モン・ドールの15日』とか『サランのシーズン』、『エクサン・サヴォワの夏』といった形式）や、『ヴォージュの鉱泉リゾートガイド』（1879年にブルミエの長男アンブローズが出版した）のようなガイドブックによって知らされた。こうした手引き書は時として韻文であるいは『リュシヨンのジャン・ボネ』のような小説形式で出された。この小説の主人公はピレネーに向かう列車の中で裕福なアメリカ人の一家と知り合いになり、彼らにリュシヨンの見所、カジノ、洞窟、バルバザンの便秘に効く泉などを紹介し、ついにはその一家の娘と結婚するに至るのである⁵¹⁾。まだ他の広告手段が限られていた当時、それらの影響は大きかった。またそうした「提灯持ち」の記事や「御用」医者などとは別に、第二帝政期には温泉町を舞台にした小説や劇作、オペレッタなどが温泉療養リゾートでの生活をもてはやすようになったが、つまり広告戦略が功を奏して「離陸」が行われたのだが、それでも温泉町の広告費は増加し続け、たとえばヴィッテルが広告に費やした金額は1882年までにおよそ15万フランにのぼったが、この額は次の10年間には10倍となったという⁵²⁾。

君主の来訪に関して「温泉史の中で温泉がこれほど政府の注意を引いたことは稀である。ナポレオン三世はこうした明示的な措置以外にも温泉リゾートにおいて一級の役割を演じた。少なくとも11回以上の温泉リゾート滞在は皇帝に温泉の治療効果を確認した『愛好者』というイメージを与えた。プロンビエール（1856年、1857年、1858年、1865年、1869年）、サン・ソヴール（1859年）、ヴィシー（1861年、1862年、1863年、1864年、1866年）などは皇帝の滞在によって変化していった。虚弱体質のために彼の侍医たちは温泉療養を勧めていた。かくして皇帝の数多くの温泉リゾート滞在はいわば君主制時代の温泉ブームの火付け役となった⁵³⁾。さらにナポレオン三世の温泉町滞在はいわゆる「温泉外交」を行うという戦略的な側面ももっていた。たとえば1857年9月に外務大臣のヴァレウスキーを伴って、シュトゥットガルト近郊のヴィルドバドに出かけ、ロシアのツァーリ、アレクサンドル三世と会談した。1858年のプロンビエール滞在中の折りにはサルデーニャ王国の政治家カヴールと秘密会談を行い（7月21日）、イタリアのオーストリアへの宣戦布告（これは結局イタリアの統一につながった）を支持する代償にサヴォワ地方やニースのフランスへの割譲を取り決めた。1859年にはサン・ソヴールに滞在し、イタリア問題の処理の

ためヴィットリオ・エマヌエレ二世の特使アレーゼ伯爵と会談を行った。1860年6月にはバーデン・バーデンに赴き、プロイセンの摂政やドイツ諸国の君主たちやデンマーク王と会談した。1861年にはヴィシーでスペインの実力者の将軍プリムと何回か会談し、外債の利子支払い停止と北アメリカへの牽制を口実としてメキシコに英仏西の三国が干渉することを約した（フランスはその後、単独でもメキシコ出兵を行い、樹立した傀儡政権の皇帝にオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の弟マクシミリアンを据えたが、1866年にはメキシコ撤退を余儀なくされた）。1862年の二回目のヴィシー滞在時には当時アメリカで南北戦争を戦っていた北軍と南軍の双方の密使が支援を訴えた。1884年には同じくヴィシーでベルギー王レオポルド一世とヨーロッパ問題とメキシコ問題（メキシコ皇帝マクシミリアンの后シャルロットはベルギー王の娘だった）について何回も話し合った。また1865年7月にはプロンピエールでプロイセンのビスマルクと会談した（両者の会談は二ヶ月後にピアリッツで、もっと詳細な部分にわたって繰り返された）⁵⁴）。

このように各温泉に滞在しながらも外交を続ける皇帝と同様、スペイン貴族が出自のユージェニー皇后もスペイン国境のピレネー地方のオー・ボーヌとオー・ショードに1855年に滞在し、1856年にはプロンピエール滞在中の皇帝を訪ね、1859年の8月から9月にかけてはオート・ピレネー県のサン・ソヴールに皇帝とともに滞在し、1861年八月には再びオー・ボ・ヌで療養を行った。また1867年七月には当時11歳の皇太子がリュションで温泉療養を行った。このように帝室メンバーの各地での多くの温泉療養にも助けられて、フランスの温泉療養は普仏戦争前には非常に繁栄していた。ヴィシーに皇帝が行かなくなってもそこには各国の君主や王妃の姿が見られた。たとえば1867年にはスウェーデン王、1869年にはロシア皇帝の妹であるマリ大公妃とその身分違いの夫ストロゴノフ伯爵。1869年のシーズンは非常に華やかで、彼女以外にも公園ではカンロベール元帥、リアリオ・スフォルツァ公爵夫人、ポニアトウスキー大公（上院議員で有名な作曲家）、ベルブフ侯爵、パイヴァ夫人、画家のギュダンとメソニエなどの姿が見られた。この年、ヴィシーには2万4,000人がやってきた。

皇帝の来訪で一番恩恵を受けたのはヴィシーであったが、すでにしてこの温泉町は皇帝来訪以前にヴィシー温泉開発会社のジョルジュ・アントワーヌ・カルー（1794-1875、大資本を持つ公共工事請負人の一人）と特に息子のアルチュール・カルー（1822-1873）の精力的な努力のおかげで、温泉療養以外にもミネラル・ウォーターの売り出しで成功し、壮麗なカジノを建設し、ヴィシー温泉の開発利用権（この温泉は国有であったが開発利用権が民間に期間を区切って賃貸されていた）の賃借期間を33年間から51年間に延長していた。こうしてヴィシーはカルーの改革のおかげで年間の温泉療養者数が1852年の7,000人から1861年の1万6,000人へと増加し、コミュニヌ自体も1,500人規模の村から3,000人規模の小都市へと変貌していた。このように冒険心に富む近代的な企業家であるアルチュール・カルーは農民から「ナポレオン四世」と呼ばれていたとゴンクールは伝えている⁵⁵）。ヴィシーを目指す人の増加でホテルの建設ラッシュとなり、1860年にはホテル数は50となり、家具付きの賃貸家屋は70軒を数えた。かくして皇帝の来訪以前からヴィシーは第二帝政の上流社会（ルオン、リタ、ヴァレウスカ、シャブリオンなどの伯爵夫人、アガド氏、ロスチャイルド氏、ドゥルー・ブレゼ氏など）や文学者（アルフォンス・カール、オーレリアン・ショール、ユージェーヌ・スクリーブ、ポンサール、年老いたラマルティーヌなど）、音楽家（マイエルベア、アレヴィ、オーベール、ロッシーニなど）、画家（ギュダン、イヴォン、フランドラン、ヴェルネ）、政治家（古株ではティエール、

ギゾー、オディロン・バロ、ドゥカーズ公爵など。新顔ではペルスイニ、ルーエル、フォルトゥール、バロシュなど）、外国の名士（ロシアはメチェルスキーとゴルチャコフの大公、スペインはナルヴァエスとプリム将軍、イギリスはクリミア戦役の英雄ラグナン将軍、ワイズマン枢機卿など）を迎え入れていたのであった。ただ一人欠けていたのは皇帝であった。

その皇帝は1861年7月と翌年の7月から8月にかけて、1864年と1866年の四回ヴィシーに滞在した、プロンビエールが皇帝の治療に向かないという侍医団の判断だといわれる。皇帝や皇后が滞在したどの温泉療養リゾートよりもヴィシーは皇帝の意志によってもっとも大きくもっとも幸運に改造がなされた町であった。「ヴィシーでは町全体が、インフラ全体が皇帝の意志のおかげで、そしてそれに由来する大規模な財政支援によって発展した。取り付け道路、公園整備、鉄道駅や市庁舎、教会や商店街、要人を迎えるための豪華な別荘や劇場やカジノのような娯楽施設などの建設など。ナポレオン三世の努力によってヴィシーは1870年以降に温泉療養の主要都市となった。ヴィシーへの入り込みは1852年の7,000人から、1861年の1万6,000人、1870年の2万4,000人に増加した。これほどの温泉療養者とその付き添いを受け入れるためにヴィシー村は50軒ほどのホテルと温泉療養に関係する多くの活動を備えた小都市へと変貌した」⁵⁶⁾。ナポレオン三世が初めてヴィシーを訪れた1861年には確かにすでにこの町は発展していたが、それでも町の収入は2万フランに達しなかった。特に都市計画はお粗末なものだった。アリエ川の岸は低く、沼地となっていた。療養のシーズンには川はあふれて町が水浸しになった。道路の名に値するのは二本か三本であり、至る所にある細い道は不便で、動物が徘徊することもあった。ホテルや別荘は無秩序に建てられていた。町の行政機能は住民1,000人規模の村のそれであった。カルーの温泉開発会社は温泉のことにのみ関わっていた。誰も町の将来を真剣に考えていなかった。そこでナポレオン三世は公共工事省の優秀な技師であるラドゥー・ドゥ・ラフォスの助けを借りて、最初の滞在の時から新たな町を作り出す計画（1861年7月27日の政令）を進め、ラフォスはその工事を指導した。もっとも大規模な工事はアリエ川の堤防建設で、そのおかげで11ヘクタールの新たな土地が公園となった。これは毎年拡大するこの町の休養場所となった。この政令はまた温泉に通じる八本の道路の建設も命じていたが、今日これらの道はヴィシーの幹線となっている。最後に教会と市庁舎の建設が行われた。これらの工事の資金は独特であった。というのも工事資金は予算からでたのではなくて、温泉開発会社が国に毎年支払う開発利用権の賃借料10万フランによってまかなわれたのである。工事は迅速に行われ、皇帝の二回目の滞在の時にはかなり進捗していた。皇帝は滞在中に工事を督促した。最後の滞在時に自分の描いた都市計画がすべて実現したのを見るのは皇帝にとって大きな満足であった。

ヴィシーほどの規模ではなかったが他の温泉療養リゾートも療養者の大幅な増加を見た。エクス・レ・バンは療養者8,000人、リュションが療養者も含めて2万人、オーヴェルニュではル・モン・ドールやラ・ブルプール、ロワイヤなどが大いに発展し、ピレネーやアリエージュ県などあまり知られていないところでも交通の不便さにもかかわらずオーリュス、ユサ、アクス・レ・テルムなどが着実に発展していた。

5. 第三共和制時代の発足から世紀末へ

普仏戦争（1870-1871）の敗北はフランス人の温泉療養熱に一時的に冷水を浴びせかけた。アルザス・ロレーヌ地方のドイツへの割譲を余儀なくされ、単なる敗戦以

上にドイツに敵愾心を起こしたフランス人は、それまでの汎ヨーロッパ的な温泉療養を疑問視し、自国の温泉に閉じこもった。その結果、かえって国内的には温泉療養は普仏戦争の影響を感じさせないものとなった。外国、特にドイツ（バーデン・バーデン）やオーストリア・ハンガリー帝国（マリエンバード、カールスバード）に温泉療養に行くフランス人には道徳的な断罪が待っていた。このような温泉ナショナリズムという「排除現象に企業家の温泉経営に対する嗜好が加わる。すでに第二帝政のもとで生まれていたこのような新たな傾向は第一次世界大戦まで高まった。温泉療養は建設と拡大と美化の時代を迎えた。新たな源泉を発見し、既存の温泉を最大限利用しようとする意思が新たなリゾートの建設によって表されたのである。…所有者の変更は常に多くて頻繁であったが、第三共和制初期と第一次世界大戦を分かつ年月の特徴となったものは、『温泉療養』の成功と、そうした滞在の快適さと美的感覚を向上させようとする欲求とにこたえようとする目標を持つ施設建設と施設整備であった」⁵⁷⁾。こうした傾向は資本の側からいうと、温泉開発ブームということになる。1875年頃、フランスの温泉町の発展が第二帝政時代を上回ったとはっきり感じられたとき、多くの実業人が温泉開発とミネラルウォーターの販売で一財産を築けると考えた⁵⁸⁾。前述したように15年ほどにわたって真の温泉開発ブームが見られたのである⁵⁹⁾。しかし、確かに源泉の調査とボーリングを専門に行う会社には莫大な利益が転がり込んだが、そうした作業を発注した温泉開発会社にとっては事情はしばしばそうではなかった。多くの失敗によって出資者は手痛い損失を被った。アナートル・フランスの父親もそうした犠牲者の一人で、友人の誘いで新たなミネラル・ウォーター開発に乗り、その結果の厄災によって宝石や銀器、農場さえも手放さねばならなかったという⁶⁰⁾。

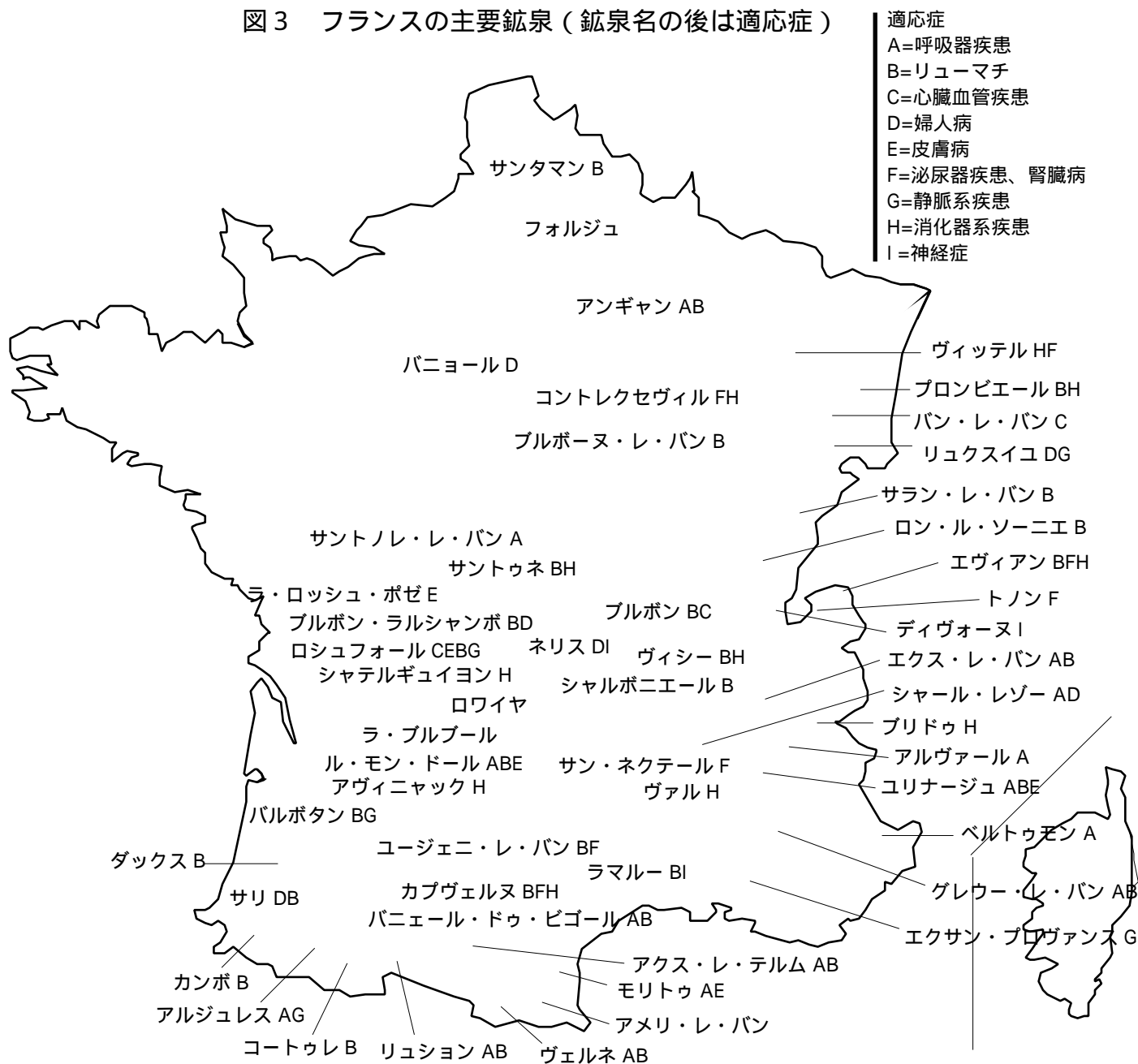
またこの時期から温泉町の広告はそれまでのガイドブックや新聞雑誌の「提灯記事」以外にも、雑誌や新聞の大広告、各リゾートや観光協会がシーズンごとに発行するパンフレット類などで行われるようになってきた。各リゾートは競って温泉の効能や娯楽を書き立てる広告を出した。さらに各鉄道会社も連絡している温泉リゾートの源泉やカジノ、豪華ホテルなどの写真やイラストで自社ポスターを飾ったのだった。1900年頃からヴィシーは「温泉町の女王」と呼ばれ始めた。ヴィシーが基準となりカプヴェルヌ・レ・バンは「南フランスのヴィシー」と呼ばれた。またブルボン・ランスイは「フランスのヴィスバーデン」と呼ばれて悦に入った。リュションは「ピレネーの温泉リゾートの女王」と既に呼ばれていたため、ヴェルネ・レ・バンは「ピレネーの天国」と呼ばれた。他の温泉リゾートは適応症を連呼した。エクス・レ・バンは「痛風とリウマチの治療に世界的に有名な温泉治療」、サン・ネクテールは新聞広告に太字でリゾート名の後に「蛋白尿症の治療」と謳った。フランス人にとって適応症の指示はなじみ深いものであった。

6. 20世紀初頭のフランス温泉事情⁶¹⁾

20世紀初めの地理の教科書ではフランスの温泉は「掘削産業」という章で、石油、鉄鉱石に次ぐ規模として紹介され、1910年に鉱山局が行った調査では公認源泉は1,376、温泉治療施設は350カ所、一日あたりの湯量は14万立方メートルにのぼった。温泉療養リゾート数は、100カ所から130カ所であった。源泉はほとんど常に山岳地帯かその際に存在する⁶²⁾。フランスの温泉療養リゾートは地理的にいって四つの大きなグループに分類される。ピレネーの温泉療養リゾート（ダックス、バニエール・ドゥ・ピゴール、コートゥレ、リュション、エクス・レ・テルムなど）、オーヴェルニュないしサントルの温泉療養リゾート（ル・モン・ドール、ラ・ブルブル、ロ

ワイヤ、シャテルギュイヨン、ヴィシー、ネリス、プーグ・レ・バンなど)、アルプスの温泉療養リゾート(ディヴォーヌ、エヴィアン、エクス・レ・バン、ユリナージュなど)、ヴォージュないしジュラの温泉療養リゾート(ブルボーヌ・レ・バン、プロンピエール、リュクスイユ、ヴィッテル、コントレクセヴィル、サラン・デュ・ジュラなど)。これら四大分類にウエスト地方やノール地方(バニョール・ドゥ・ロルヌ、フォルジュ・レゾー、サンタマン・レゾー)、モンターニュ・ノワール(バラリュック、ラマル)、プロヴァンス(エクサン・プロヴァンス、グレウーなど)などの地方の温泉療養リゾートを付け加えることができる。最後に、コルシカ島の温泉は非常に鉱物質が多いが、あまり開発されていない(オレザ、バラキ、ガーニョなど)。これらの温泉療養リゾートの地理的分布を地図上で示したものが次に見る図3である。

図3 フランスの主要鉱泉(鉱泉名の後は適応症)



フランス経済の中に占める温泉町の位置を評価するのは困難であるが、「温泉リゾートは起爆剤の役割を果たした。あらゆる種類の生産物とサービスに市場を与えることによって、温泉リゾートは新たな活動の創出や生産の改善を促進したのであった」⁶³⁾。断片的なデータを継ぎ合わせて推計すると、1910年現在のフランスの温泉療養の基本的な状況が浮かび上がる⁶⁴⁾。温泉町の繁栄は着実であるが、特に20ほどの温泉リゾートではめざましい。1890年以降は沈滞し、小さな温泉町では後退するところもでる。ホテルと温泉施設の両面で療養者の期待に応えられなくなったからである。1914年まで見られた温泉療養者数の増加は主として大温泉リゾートを訪れる療養者が増えたためであった。療養者数はヴィシーでは1890年の4万人から1905年の9万人、1913年の12万人へと拡大し、エクス・レ・バンでは1890年の3万人から1914年の5万人へと増加した。第一次大戦前夜にはリュションは5万人、シャテルグイヨンやル・モン・ドール、ラ・ブルプール、エヴィアン、ヴィッテルなどは1万5,000人から3万人の療養者を迎えていた。とはいえ、これは多少なりともどの時代にも当てはまることなのだが、本当に心身の疾患をいやすためにやってくる「客は『温泉療養者』の一部分でしかなかった。多くの客は衛生学者の説に従って、ただ単に心配事から解放されるために健康によく、人を楽しませる快適な環境にやってくるのだった」⁶⁵⁾。

1910年のある調査⁶⁶⁾では大戦直前における次のような三つの推計が出された。1：いわゆる療養者は37万5,000人。2：付き添いないし観光客は32万5,000人。1と2の合計が70万人。3：最近10年間の増加数は5万5,000人（付き添いは療養者数の87%と推計された）。また同調査ではすべての来訪者の支出した金額の推計も試みられた。控えめに見積もっても各シーズンに各人が支出したのはおよそ400フランとされた。この見積もりをもとに計算すると70万人の来訪者は合計2億8,000万フランを支出したことになる。またミネラル・ウォーターの出荷量は1億1,500万本、売値の合計はおよそ4,500万フランであった。ヴィシーは2,600万本、サン・ガルミエ（バドワ）は2,500万本、エヴィアンが1,200万本、ヴィッテルが800万本、プーグが300万本など。結局、温泉リゾート全体で支出された額は2億8,000万フラン、ミネラル・ウォーターの売上高は4,500万フラン、両者合計で3億2,500万フランであった。しかしこの調査で出された数字は控えめなもので、1913年には少なくとも80万人が温泉町を訪れたと思われる。またヴィシーやエヴィアン、コントレクセヴィル、ヴィッテル、ル・モン・ドールなどのミネラル・ウォーター会社の株主は30年足らずで株の価値が二倍になった。1901年当時のフランスの人口は3864万1,333人（ただし普仏戦争の敗北以来ドイツ領となったアルザス・ロレーヌ地方は除く）であったが⁶⁷⁾、そのうち「50万人のフランス人が温泉産業に部分的あるいは全面的に依存していた」⁶⁸⁾。

しかしながら温泉町の根幹を揺るがしかねない問題は、コミュニヌが温泉を経営しない限りいかなる利益も受けることはないということ、つまり財源不足のために美化作業や基本的な衛生設備の設置に必要な措置さえとれないということであった。第二帝政時代のような気前の良い補助は期待できなかった。人口が500人や1,000人の村や小都市が、夏期には2万から5万に膨れあがる人口に対応するサービスをまかなう財源など持っていなかった。1896年に公衆衛生局総監のアドリアン・プルースト教授（作家マルセルの父親）はクレルモン・フェランで開催された鉱泉療法会議に内務大臣代理として出席し、開会演説で温泉施設の改善や衛生設備の設置だけに充てられる地方財源を創出する必要性を訴えた。ドイツではこのような財源不足の問題は療養

税、つまりフランスでいうところの滞在税によって打開が図られていた。

1806年6月24日のナポレオン一世の勅令によって開設可能になったフランスの温泉療養リゾートでのカジノなどの賭博施設はたいていの場合地元自治体の運営ではなく、したがって地元自治体は営業停止をちらつかせながらカジノ所有者と売上げの一部を地元自治体に納めさせるための長く困難な交渉を行っていた。「かなり多くの論争や論戦の後、カジノの新たな設置様態を定める法律が誕生したが、この1907年6月15日法は海水浴リゾート、温泉リゾート、保養リゾートにおけるギャンブルを規制し、次のことを定めている。『刑法第410条に対する例外措置として、海水浴リゾート、温泉リゾート、保養リゾートにおける会員制クラブやカジノに対して、はっきりと分けられ、そこで幾つかのギャンブルが行われるであろう特別な場所を公衆に対して開設する季節営業許可が与えられうる』。このようにギャンブルを合法化し、国家はコミューヌのため（祖収入の10%）と同様、自分のため（祖収入の15%）にもこの営利活動を管理したのである」⁶⁹⁾。しかしこの騒動は、ギャンブルに由来するいささか不純な財源は温泉町の主要財源には相応しくないことを思い知らせた。そこで滞在税が祖上に上ることになる。「1910年には任意の滞在税が認可さえされ、それを望んだリゾートはホテルを介して、リゾートが望んだり実現しなければならない健全化作業や美化作業をまかなう財政手段に与ることができるようになった」⁷⁰⁾。この1910年4月13日法は公式に鉱泉療法リゾートと気候療法リゾートを創設し、その発展のために特別税を徴収することを可能にした。この新税は税率についても、徴収そのものについてもコミューヌの任意であった。ダックスやラマルー、ラ・ブルブル、ル・モン・ドールなどのように率先して範を示したリゾートもあったが、多くのリゾートはわずかな額ではあるが滞在税徴収によってライヴァルのリゾートの客が流れることを恐れて徴収を躊躇した。さらに実際に徴収業務に当たるホテル関係者も客からの反発を恐れたので、非常に不満を露わにした。その結果、滞在税の義務化が考慮された。なんと言っても温泉リゾートの存在する自治体にとって滞在税は必要なものであったのだ。しかし滞在税が強制徴収されるのには第一次世界大戦後の1919年9月24日法を待たねばならなかった。

20世紀初頭の段階（1914年）では、リール、ボルドー、トゥールーズの大学医学部には鉱泉療法の講座が存在したが、首都パリには存在しなかった。こうした状況は危機的であり、ドイツに対して不利な立場に立っていることが強調され、鉱泉療法教育の組織化が望まれた。そして1913年にやっとパリの高等教育実業学校 *École pratique des Hautes études* 内にコレージュ・ドゥ・フランス付きの鉱泉療法・気候療法研究所が設立された。同様の研究所が様々な地方大学に設立され、「鉱泉療法学修了証」が交付された。

また20世紀初頭からは「有名な大温泉リゾート（エクス・レ・バン、ダックス、ヴィシー、ヴィッテル）では、裕福な客層向けのパレス風ホテルや広大な豪華ホテルの出現が特徴となった。カジノの数も増加した。エクス・レ・バンやヴィシーのように複数のカジノが設置されているリゾートを見るのも稀ではなくなったが、そうしたリゾートの状況は無秩序となったので、政府は『ゲームの規則』を再び定めねばならなかった」⁷¹⁾。このように1905年以降、特に1910年頃にイギリス風にパレスと呼ばれた新世代の大規模豪華ホテル（パレス風ホテル）が首都や有名な海浜、コートダジュール、温泉町に出現した。マジエスティックやカールトンなどの英語を冠したり、テルマル・パレスやインターナショナル・パレスなどのようにパレスを付けたりしたこうした巨大ホテルは最新の設備（客室への浴室とトイレの設置、給湯設備、全館電気照明、エレベーター、電話室、内線電話、セントラル・ヒーティング、自動車用ガレー

ジなど)を誇り、しばしば300室を越える客室を誇っていた。ヴィシーではこの種の大規模ホテルの最後は1913年開業のリュル・ホテルで、350部屋350浴室と誇らしげに謳っていた。こうしたホテルが出現したのには社会的な背景がある。裕福な温泉療養者はますます一般の療養者と離れ、ついに全く別なホテルに滞在するようになったのである。温泉療養リゾートでは一般的にホテルの営業は5月から10月までであり、満室となる可能性のあるのは6月15日から9月15日までのシーズン最盛期であることを考えると、こうした巨大ホテルへの莫大な投資には驚かざるを得ない。またホテル経営の集中も進んだ。たとえばヴィシーではジョゼフ・アレティがヴィシー内のすべてのパレス風ホテルを傘下におさめた。ホテル経営者は資本をよりよく回収するためにパレス風ホテルを温泉町とコートダジュールの両方に持つようになった。

7. 第一次世界大戦

第一次世界大戦は温泉療養への関心を一時的に中断した。ナポレオン三世の第二帝政時代から続いた贅沢な温泉療養の時代の後でフランスの温泉リゾートは戦時色に染まり、傷病兵用の温泉病院が急いで建設された。列車は前線から負傷兵を運び、彼らは都市の大病院でさえもすべて備えているわけではない医学設備と休養施設を目の当たりにした。この戦争の時期に温泉リゾートが果たした貢献は戦後に報われた。というのも1919年9月24日法は、その行政区域内に鉱水の源泉か、源泉を利用した一つ以上の温泉施設を持っているコミューヌ、コミューヌの一部、コミューヌグループに対して鉱泉療法リゾートへの昇格を認めたのである。またこの法律によって滞在税は義務的なものとなり、カジノの収入の一部がコミューヌの財源を潤した。両大戦間には温泉リゾートへの入り込みが次第に回復してくる。カジノの増加がそれに続いた。アメリ・レ・バンでは1922年に新たなカジノが建設された。バニョール・レ・バンとダックスでは1927年に二番目のカジノが開設された。

「両大戦間、特に社会保険に関する1930年法に結びつく幾つかの社会措置の刺激を受けてフランスの温泉療養はますます多くなる客を持つに至った」⁷²⁾。こうした客層は依然としてほとんどが裕福な階級に属していたが、それでも往復の交通費と現地での温泉治療費(医師への謝礼も含めて)、住居費、食費など基本的な支出以外に、カジノの予約、観劇、エクスカーション、その他様々な付随的な出費によってこうした家族旅行(時として子供の家庭教師も随行した)は非常に高価であることに変わりはない⁷³⁾。「こうした条件にも関わらず夏の移動が多くのフランス人にとって習慣となり、『競馬と同じほど一般的な情熱』となったことは、それだけ驚くべきことである」⁷⁴⁾。このため第一級のホテルの建設が相次いだ。これは各リゾートが伝統的な客をつなぎ止めながら、旧式のホテルに昔ながらの客層ほどには気前の良くない温泉療養の新たな愛好者を宿泊させることを可能にした⁷⁵⁾。とはいっても全体的に見れば温泉療養を行えるほどに「裕福」な階層はこの時代においてもまた圧倒的に少なく、一般の労働者には有給であれ無給であれ休暇すら満足にとれなかったのは事実である。それどころか「大部分の労働者にとって自由時間の意味していたのはレジャーではなく、恐るべき失業であった。ヴァカンスという考えは彼らにとってまだ何の意味も持っていなかった」⁷⁶⁾。

8. 世界恐慌から第二世界大戦へ

1929年の世界恐慌はフランスを数年遅れで直撃し、温泉リゾートの入り込みに深

刻な影響を与えた。実際、温泉療養は他の観光活動と同じく、国内外の経済状況に大きく依存している。すべての温泉リゾートが影響を受けたが、中小は大手以上に打撃を被った。この時期、落ち込みはブルーで30%、ダックスで25%、ブリド・レ・バンで21%、サン・ジェルヴェで19%、ヴィッテルで13%、エクス・レ・バンで11%、ヴィシーで7%であった。外国人の来訪減少は歴然としていた。各リゾートが恐慌前の水準を回復するには1936年から1937年を待たねばならなかった⁷⁷⁾。そして1936年には戦後のフランスの温泉療養の大衆化を射程におさめる措置が発効した。有給休暇制度の創設である。これによって一般の被使用者は一年の勤務の後に2週間の有給休暇を取得する権利を得た。とはいえ権利だけでは現実には形成されない。確かに当時の人民戦線政府の余暇省の政務次官レオ・ラグランジュのイニシアティブでキャンプ場の整備、ユースホテル網の拡充、諸鉄道会社（1939年にフランス国鉄が発足するまでフランスの鉄道は六大鉄道会社が競合していた）の割引運賃の設定などの努力が行われたが、大規模な移動に伴う宿泊手段はキャンプや出身農村の親や友人の家ぐらいしかなかったのである。伝統的な宿泊形態であるホテルは、新たに有給休暇の権利を得た社会層にとってはあまりにも高価であった。温泉療養は「ヴァカンス」があろうとなかろうとそうした社会層にとっては無縁の存在だったのである。このようにマス・ツーリズムの時代は始まったが、その真の大きさが感じられたのは戦後になってからであった。

9. 温泉リゾートのイメージ創造力

20世紀に入ったからといって各リゾートの日常生活はほとんど変化しなかったが、治療客に提供される娯楽や気晴らしは多様化し、ゴルフや美人コンテスト、競馬や周遊の手配などがいっそう多く見られるようになった。ホテルやカジノ、パレス風ホテルなどの建設も増加した。療養中にも普通通り贅を尽くした生活を続けるためにそうした施設や設備の需要は切迫していた。サロンや他の出会いの場所は重要で、療養者（依然として特権的な階級と料金に余りこだわらない外国人客）は彼らの自宅でと同じような習慣（人を迎え、社交生活を送ること）を続けられたのである。

その多くが裕福な階級に属していた文学者や芸術家もまた、病気の回復を願って、あるいは夏の社交のたしなみとして温泉療養リゾートに滞在した。さらには自分の評判に箔を付けるために温泉リゾートに滞在することもまた重要となった。

19世紀後半から両大戦間に至る温泉療養がわれわれに残した豪奢で軽薄なイメージを広めたのはそうした文学者、芸術家たちでもあった。彼らは温泉町の持つ創造性に触発されて、その姿をわれわれに伝えたのである。従って彼らは温泉療養に新たな文化的次元を与えたのだが、この次元は今日まで残存する温泉リゾートのイメージ形成に大きく寄与し、それ以後は強く文化的な集団的記憶に結びつくこととなる。

彼らの滞在を簡潔にまとめた文章を引用しよう。「作曲家のサン・サーンスはブルボン・ラルシャンボで温泉療養を試み、ミシュレとその妻（治療に従ったのは彼以上に妻の方であった）は最初1860年にフォルジュ・レゾーに、次いで1865年にエクス・レ・バンに、さらに1866年にはバニョール・ドゥ・ロルヌ、ついでエヴィアンに滞在した。1862年にフローベールは母親と共に続けて二回ヴィシーに滞在した。次いで1872年には親戚の女性と共にリュシヨンに滞在した。ゴンクール兄弟はヴィシーを好んだが、1869年にはロワイヤに滞在した。ステファヌ・マラルメは188年にロワイヤに滞在したが、彼には心地よい感覚を与えられた治療を受けることが出来て幸福であった。子供時代のジッドは1882年にラマルー・レ・バンに滞在し、

次いで同じくブルーストは1885年にサリ・ドゥ・ベアルヌに、次いでもっと後にはモン・ドレやエヴィアンに滞在した。アルフォンス・ドーデは1879年に病気にかかったときにアルヴァール・レ・バンにやってきたが、そこにはコレットやジッドも来ていた。モーパッサンは1883年から1886年までシャテルギュイヨンに通ったが、彼の小説の『モンリオール』はその背景に様々な源泉の所有者の敵対関係が描かれている。この小説は皮肉を効かせたタッチで、源泉の支配をもくろみ、温泉施設管理を願う資本の所有者の相反する利害の対立と同時に、温泉リゾートの記述と働きをも描いている。モーパッサンは次にエクス・レ・バン、プロンビエール、ディヴォーヌに滞在した⁷⁸⁾。モーパッサン以外に温泉療養をテーマとする紀行や作品を残したのは、たとえばテーヌ(1858年の『ピレネー紀行』)、アルフォンス・ドーデ(死後出版の『ラ・ドゥルー』)、オクターヴ・ミルボー(1901年の『神経衰弱患者の21日間』)などが挙げられるが、作品中に部分的に温泉療養の体験や描写が見られる例は無数である。

おわりに 保養リゾートの交代

19世紀後半以来、古くからの保養リゾートとしての温泉町を追うように、新たな保養リゾートが増加してくる。海水浴リゾートである。「控えめなデビューのあと、沿岸の街々は温泉街の競争相手となった。沿岸の街は、きわめて魅力的な温泉街の娯楽や建築、日常のリズムを再現した。... 海水浴場は中産階級を惹き付けようとしていた。ペンションに泊まるにしろホテルに投宿するにせよ、彼らはことごとく、しかるべき人々である。しかし、鉄道の出現は、もっと謙虚な社会階級を遠ざけることを不可能にしてしまった。実際は、多くの海水浴場では、たとえ一日であっても労働者が客としてくるのは、本当に新しいことだったわけではない。... 鉄道は、この愛好者たちの一団を波に変えた。事業は事業であるから、海水浴場はこの好機をつかまねばならなかった⁷⁹⁾。この文章はイギリスについて書かれたものであるが、フランスも同様のプロセスを辿ることとなる。「貴族と大ブルジョワジーは衛生学者の説とイギリスに影響されて夏の暑さの間パリを離れ、海水浴リゾートか温泉リゾートに姿を見せた。それは『保養』の時期だった⁸⁰⁾。古くから余暇をこうしたリゾートで消費してきた裕福な階級は金融や産業の成金たちや自由業、商人や公務員までもがまずは温泉町におずおずと侵入してくるのを見て苛立ち、「大衆化した」(といっても真の大衆化にはほど遠かったが)温泉町から北フランスの海岸を中心とする海浜に夏の保養地を移し始める(地中海のカヌヌやニース、マントンなどは依然として冬の避寒地であった)。また彼らが今度は海水浴リゾートに侵入を企てるのを見て上流階級は自分たちの独自性と排他性が保たれる保養地をディエップからトゥルーヴィルへ、トゥルーヴィルからドーヴィルへと次々に代えていった。彼ら排他的な階級は知らず知らず観光大衆化の先導を努めていたのである。彼らの後にはブルジョワが続き、ブルジョワの後には労働者が従うという観光形態の伝播は温泉リゾートでも海水浴リゾートでも確実に進行していた。

一方で第二次世界大戦後、正確には1950年以降、フランスの温泉事情はそれ以前とは全く性格を異にするものに変化した。社会保障が温泉療養を認めたため、比較にならない数の療養者が誕生したのである。医療体制に組み込まれた大衆温泉療養時代が到来した。いまだに温泉療養リゾートの豪華でロマンティックなイメージが20世紀初頭の集団的な記憶に結びついているとはいえ、フランスの温泉療養はその利用者の数と構成において全く新しい時代を迎えたのである。

- 01) Eugen Weber, *Fin de siècle La France à la fin du XIX^e siècle*, traduction française, Fayard, 1986.
- 02) Cf. Georges Cazes, *Le tourisme en France*, PUF, 1984, p. 88.
- 03) Cf. Marc Boyer, *Le tourisme de l'an 2000*, Presses universitaires de Lyon, 1999, p. 90.
- 04) 幾つかの用語について。
- 「鉱泉療法、温泉療法」(Thermalisme) : 温泉や冷泉を使用した疾患の医学的治療。ちなみにフランスの鉱泉で最も高温なのはショードゼーグ(カンタル県)の81(ヨーロッパ記録)、最も低温なのはディヴォーヌ・レ・バン(アン県)の7である(いずれも湧出時)。
- 「温泉町」(Villes d'eaux) : 1850年以降、つまり鉱泉療養者数が大幅に増加したために、源泉を持つ多くの村々が実質的には町に変化した時期からの呼称。しかし本稿では19世紀半ばまでの鉱泉療養地を持つコミューヌを「温泉町」と表記する。
- 「鉱泉療養リゾート、温泉療養リゾート」(Station thermale) : 1860年以降に出現した新しい呼称で1890年以降は温泉町の一般的で公的な呼び方にもなる。
- 「鉱泉療養者、温泉療養者」(Baigneurs, buveurs d'eaux, curistes) : baigneursは鉱泉入浴者、buveurs d'eauxは鉱泉飲用者、curistesは総合的に鉱泉療養者のニュアンスがある。前二者は1914年頃までほとんど区別なく使用されたが、curistesという呼称は第一次世界大戦後に一般化した。
- 「鉱泉療養、温泉療法、湯治」(Cure) : もっと古くから使用されていたstationに代わった。
- 「シーズン」(Saison) : シーズンとは鉱泉療養を行う期間を意味する。平均的には5月から11月までだが、通年営業の温泉療養リゾートも存在する。また「鉱泉療養」そのものを意味することもある。
- 05) Cf. Philippe Langenieux-Villard, *Les stations thermales en France*, PUF, 1990, pp. 11-12.
- 06) Jean Michel Hoerner, *Géographie de l'industrie touristique*, Ellipses, 1997, p. 14.
- 07) Jean-Paul Clébert, *Guide de la France thermale*, Horay, 1974, pp. 12-13.
- 08) Clébert, *op. cit.*, p. 15.
- 09) *Ibid.*, p. 16.
- 10) 「たとえばバルボタン・レ・テルムでは教会は温泉地の泥土に非常に近いので、教会はピロティの上に建てられているほどである。グレウー・レ・バンではモンマジュールのベネディクト会の修道士が小修道院を建て、源泉をキリスト教化し、その使用を管理していた。アメリ・レ・バンは786年にシャルルマーニュによってベネディクト会に譲渡された。同様に、ヴィシーの温泉の周りにもサンタリールやクレルモン・フェランのベネディクト会修道士が修道院を建設した。その反対にサントノレでは近隣の小修道院の修道僧たちがガロ・ロマン時代の温泉を埋めてしまい、余りにも迷信に毒されていると判断された慣習に終止符を打っ

- た」。 (Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 15.)
- 11) *Ibid.*, p. 16.
 - 12) Cf. Armand Wallon, *La vie quotidienne dans les villes d'eaux (1850-1914)*, Hachette, 1981, p. 18.
 - 13) Michel de Montaigne, *Essais* in *Œuvre complète*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962, p. 756.なお邦訳は原二郎訳『エッセー』岩波文庫、1966年による。
 - 14) Michel de Montaigne, *Journal de voyage en Italie par la Suisse et l'Allemagne* in *Œuvre complète*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962, pp. 1115-1342.
 - 15) Clébert, *op. cit.*, p. 20.
 - 16) ブルボン・ラルシャンボはブルボン家発祥の地である。かくしてケルトの温泉神ボルヴォはフランス王家にその名を与えたのであった。
 - 17) この職責は国王の開封勅許状によって行われたが、その一部を以下に挙げる。「それによってわれらの王国を他のすべての王国よりも優位に立たせることが神の思し召しにしたがうような恩寵と恵みの中で、民衆の健康を確かなものにし、それを維持することは、ふんだんに存在する温泉や鉱泉がそうしているように、われらの主要目標の一つである。これはすべての臣下の身近にありまた行くことのできるものなので一層大きな推奨の理由となるのである。しかしながらそれが豊富に存在するからといってもっとも有用なもの自体が軽く見られてしまうように、いわゆる温泉や鉱泉を探查することでできる限りこうした恩寵を増やそうとしたり、獲得したものを維持しようとすることに不熱心なわれらの家臣は、そうした温泉や鉱泉を衰退するままに放置している」 Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 20-21.
 - 18) Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 18.
 - 19) Clébert, *op. cit.*, p. 21.
 - 20) Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 19.
 - 21) Weber, *op. cit.*, p. 222.
 - 22) Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 23.
 - 23) Cf. *Ibid.*, p. 24.
 - 24) 王は同時にパールとロレーヌの公爵領の領主であり、自分の勢力範囲にある源泉の維持と改善にかなり力を用いた。バン・レ・バンでは温泉施設を再建し、遊歩道を整備させた。同様にコントレクセヴィルの鉱泉水を分析させてそこに最初の温泉施設を建設させたのであった。
 - 25) Langenieux-Villard, *op. cit.*, pp. 20-21.
 - 26) 療養者数の増加に伴い一人の温泉監督医だけでは一つの温泉のすべてに責任を持つてなくなったので、副監督医職が設けられたが、その選から漏れた温泉医たちの不満は大きく、結局は1889年の温泉監督医制度廃止につながった。
 - 27) Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 23.
 - 28) Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 26-27.
 - 29) Weber, *op. cit.*, p. 222.
 - 30) *Ibid.*, p. 232.
 - 31) Marc Boyer, *Histoire du tourisme de masse*, PUF, 1999, p. 30.
 - 32) Weber, *op. cit.* p. 222.
 - 33) *Quid 2000*, Robert Laffont, 1999, p. 601.

34) Cf. Wallon, *op. cit.* pp. 31-39.

35) 大規模で話題になったものとしては1844年のヴィシーにおけるプロソン兄弟のボーリングがある。しばらく国からヴィシーの源泉利用権を賃借していたプロソン兄弟は自分たちが排除されたのに腹を立て、1844年に主要源泉の地下200メートルへのボーリングを開始した。中止命令にも関わらずボーリングは続行され、ついに1844年1月9日午前11時に地下54メートルにまで達していたボーリング坑から温泉が空高く噴出した。この源泉はパルク源泉と命名されたが、その結果としてヴィシーの主要源泉の湧出量は三分の一にまで減少し、湯温も目に見えて低下した。当局は為す術がなかったが、ヴィシーの住民は町の破滅に関わると考えて市長や憲兵の制止を振り切って現場に大挙して押し掛けて、施設の取り壊しを求めた。プロソン兄弟は群衆の剣幕に恐れをなして源泉に栓をせざるを得なかった。Cf. Wallon, *op. cit.* pp. 101-102.

36) Langenieux-Villard, *op. cit.* p. 27.

37) *Ibid.*, pp. 28-29.

38) Alain Corbin, *L'Avènement des loisirs 1850-1960*, Aubier, 1995, p. 27. (渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店、2000年、33ページ)

39) Weber, *op. cit.* p. 220.

40) Langenieux-Villard, *op. cit.* p. 30.

41) Cf. Nacima Baron-Yellès, *Le tourisme en France Territoires et stratégie*, Armand Colin, 1999, p. 26.

42) 本稿では便宜上「温泉町」と記しているが、ほとんどの「温泉町」の実態は前述したように第二帝政時代までは「村」の規模でしかなかった。1914年当時でさえ、温泉町はエヴィアンのようにいかに繁栄しようとも人口は3,000人止まりであり、過半数の温泉町は1,500人以下、さらには1,000人以下のところもあった。第二帝政時代には人口100人から300人の村でしかなかったル・モン・ドール(1,400人)やラ・ブルブル(2,000人)の人口増加は著しいが、それでも人口規模は小さな町といったところである。そもそもフランスの都市分布において温泉リゾートは気候療養地や海水浴リゾートと共に「季節都市」として分類される特殊な例となっている。定住人口からいえば都市の名に値する温泉町は少数なのである。非常に繁栄している温泉町でも季節雇用的な性格が原因で、工業都市とは違って、直ちに人口増加につながるわけではない。しかしヴィシーは例外であって人口は1850年の1,500人から1914年の1万5,000人に増加した。同時期にエクス・レ・バンは3,000人から9,000人へと、それほど目覚ましくはないが確実な人口増加を遂げた。しかしビアリッツのようにもともと温泉町や気候療養地であったものが、海水浴リゾートとして発展した町は別である(1855年の3,500人から1914年の1万8,000人)。ダックスとかバニェール・ドゥ・ピゴールのような温泉町は第二帝政時代初期にはすでに小都市であり(前者は8,000人、後者は6,500人)、人口の増加は緩慢であった(1914年に前者は1万1,000人、後者は8,000人)。リュションはその成功にも関わらず人口は3,500人ほどにとどまった。

43) 所有者の名前を冠したそれらの建物は、たとえば1840年頃のヴィシーではプロネ館、ソルナン館、ギエルマン館などが有名であった(これら三館は古くからの地方名望家の一族の所有であった)。こうした改良された宿屋はブルジョワ用の味気ない建物のようにだったが、第二帝政時代初期には相変わらず各部屋毎のトイ

レや浴室の設置を始めとする近代的設備を持たない30から40の客室を備えていた。

- 44) こうした外部資本のホテル経営者は自分の名前をホテルに冠する必要はなかったので、地理にちなんだホテル名や（フランス・ホテル、イギリス・ホテル、ロシア・ホテル、パリ・ホテル等々）、温泉町にちなんだホテル名（温泉ホテル、源泉ホテル、浴場ホテル、温泉施設ホテルなど）がリュションからエクス・レ・バンまで、ヴィシーからダックスまで、至る所の温泉町で見られた。他の名称は主として「グランド」という形容詞が付き、大規模であることを表していた。アンバサダー・グランドホテルとかプリンス・グランドホテルなど。もちろん特に意味のない名称も多かった。グランドホテルとか近代ホテルのように。またイギリスかぶれによって英語風の名称を持つホテルも存在した。モダン・ホテル、セレクト・ホテルなど。だが評判のいいホテルは正式な名称ではなくてその所有者の名を冠して呼ばれることもあった。たとえばエクス・レ・バンの「ヨーロッパ・グランドホテル」は常に所有者の名を取ってベルナスコン・ホテルとも呼ばれたのだった。
- 45) 1913年には上位の16温泉リゾートがそれぞれ10人以上の医師を抱え（ヴィシー100人、エクス・レ・バン28人、ル・モン・ドール23人、ラ・ブルブール23人、リュション20人、コートウレ20人、シャテルギュイヨン17人、ヴィッテル15人、エヴィアン14人、エクサン・プロヴァンス12人、ロワイヤ12人、ダックス12人、パニエール・ドゥ・ビゴール11人、プロンビエール10人、コントレクセヴィル10人）、第二グループの25温泉リゾートがそれぞれ5人から10人、第三グループの28温泉リゾートがそれぞれ2人から5人、その次の14温泉リゾートが2人、そして17温泉リゾートが一人の温泉医をもっていた。
- 46) Cf. Wallon, *op. cit.* p. 36.
- 47) Langenieux-Villard, *op. cit.* p. 30.
- 48) Guy de Maupassant, *Mont-Oliol in Romans*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987, p. 685.
- 49) ガイドブックの『ジョアーヌ』の1863年版によると「ヴィシーはスパーやバーデン・バーデン、オンブルクの支店ではない」。しかし1864年版のガイドブック『ガルニエ』によると「カジノはヴィシーの将来にとって基本的な問題である」、としてバーデン・バーデンやヴィスバーデン、オンブルク、エムス、スパーなどの輝かしい成功をあげている。Cf. Wallon, *op. cit.* p. 40.
- 50) ヴィッテルの開発者、筆者註。
- 51) Weber, *op. cit.* p. 229-230.
- 52) Cf. *Ibid.*, p. 230.
- 53) Langenieux-Villard, *op. cit.* p. 28.
- 54) Cf. Wallon, *op. cit.* p. 40.
- 55) Cf. Edmond et Jules de Goncourt, *Journal*, 3 vols, Robert Laffont, 1989, tome 2, p. 99.
- 56) Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 29.
- 57) *Ibid.*, p. 33.
- 58) 7月王政末期（1844年）のプロソン兄弟の騒動に次いでこの当時の第三共和制初期に有名だったのはヴィシー（この温泉は国有で民間の開発会社が開発利用権が賃貸されていた）のニコラ・ラルポー（作家ヴァレリ・ラルポーの父親）による鉱泉開発である。ラルポーはすでに第二帝政時代にヴィシー近郊のサンティヨー

ルでミネラル・ウォーターのボトリング事業で成功していた薬剤師であったが、1870年11月にヴィシーのモンタレ通りの自宅薬局敷地で、アリエ県知事の中止命令にもかかわらず開発許可なしでボーリングを開始し、掘り当てた源泉にヴィシーの温泉監督医プリユネルの名を冠して、鉱水飲用所を開設して無料で新たな源泉の鉱水を分け与えた。そこからラルポーと敵方（温泉開発会社、国、国の代理人たるアリエ県知事）の訴訟合戦が勃発したが、結局1878年12月26日にプリユネル泉の開発許可が認められたのだった。Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 104-107.

- 59) こうした温泉開発ブームはシャテルギュイヨンを舞台としたモーパッサンの小説『モントリオル』に詳しく描かれている。地元資本とパリ資本、所有者同士の角逐、温泉医師団の反目、買収、新温泉の売り出しなどを一組の男女の恋と絡めて描くこの小説の詳細については拙稿「モーパッサン『モントリオル』を読む 世紀末温泉開発ブーム」（『研究紀要』第13巻第1号、宮崎産業経営大学法学会・経営学会・経済学会、2000年）を参照。
- 60) Cf. Wallon, *op. cit.*, p. 99.
- 61) Cf. *Ibid.*, pp. 109-127.
- 62) とはいえ当時はパリ郊外のパスイにも有名な温泉があった。1660年頃に発見されたが、特に開発されたのは18世紀である。大都市で生活するストレスを癒すとして大学医学部がこぞって推薦したこの温泉は、浄化作用があると考えられた緑とともに、多くの来訪を誇った。しかし革命によっていったん寂れるや、社会が落ち着いても再び昔日の勢いを取り戻すことはなかった。というのもこの温泉の重大な欠陥は大都市に接して位置するということなのだった。時代はもはや旅行なしでの温泉療養を考えられないようになってしまったのだ。パスイ温泉の温泉施設は1868年に閉鎖されている。またパスイ以外にもオートウイユやバティニョル、ポン・ドーステルリッツ、ヴァンドーム街（現在のベランジェ街）、ベルヴィルなどに温泉があったというが、特に1851年に発見されたベルヴィルの温泉については金融会社が「温泉町パリ」として売り出そうとして1868年には温泉施設まで建設したが完全な失敗に終わった。他の都市、たとえばブザンソンにもムイェール温泉があったが、大きな名声を得るには至らなかった。だからといって都市部で温泉を売り出そうという企てがなくなったわけではない。たとえばナンシーでは源泉が発見されてのち1908年以降に温泉施設建設が真剣に考えられて1912年に実際に工事が行われた。一般的に大都市に近いことはいわゆる温泉療養にとって有利ではなく、そうした場合、リヨン近くのシャルボニエールやパリに近いアンギャンなどのように、温泉の質とは関係なく、治療よりはカジノのなどの遊興的な分野に力点が移ってしまうのである。
- 63) Weber, *op. cit.*, p. 228.
- 64) Cf. Wallon, *op. cit.*, 1981, p. 116.
- 65) Nadine Beauthéac, *L'art de vivre au temps de Proust*, Flammarion, 1999, p. 112.
- 66) Cf. Wallon, *op. cit.*, pp. 117-119.
- 67) *Quid 2000*, p. 601.
- 68) Weber, *op. cit.*, pp. 226-227.
- 69) Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 34.
- 70) *Ibid.*, pp. 34-35.
- 71) *Ibid.*, p. 34.

72) Cf. *Ibid.*, pp.35-36.

73) 当時は子供に一人でヴァカンスを取らせるという習慣がなかったので子供たちは両親に従って温泉町に来るか、親族や友人たちに預けられた。

74) Weber, *op. cit.*, p. 234.

75) Cf. Langenieux-Villard, *op. cit.*, pp. 34-36.

76) Weber, *op. cit.*, p. 237.

77) Cf. Langenieux-Villard, *op. cit.*, p. 36.

78) *Ibid.*, pp. 38-39.

79) Corbin, *op. cit.*, pp. 38-39. (渡辺響子訳 『レジャーの誕生』 45 ページ)

80) Beauthéac, *op. cit.*, p. 107.

引用参考文献

ANGELIER, Maryse, *Voyage en train au temps des compagnies (1832-1937)*, La Vie du Rail, 1998.

BARON-YELLÈS, Nacima, *Le tourisme en France Territoires et stratégie*, Armand Colin, 1999.

BEAUTHÉAC, Nadine, *L'art de vivre au temps de Proust*, Flammarion, 1999.

BOYER, Marc *Histoire du tourisme de masse*, PUF, 1999.

Invention du tourisme, Gallimard, 1996

Le tourisme de l'an 2000, Presses universitaires de Lyon, 1999.

CARON, François, *Histoire des chemins de fer en France 1740-1883*, Fayard, 1997.

CAZES, Georges, *Le tourisme en France*, P.U.F., 1984.

CHAMBRIARD, Pascal, *Aux sources de Vichy*, Bleu autour, 1999.

CLÉBERT, Jean-Paul, *Guide de la France thermale*, Horay, 1974.

CORBIN, Alain, *L'Avènement des loisirs 1850-1960*, Aubier, 1995.
(渡辺響子訳 『レジャーの誕生』 藤原書店、2000年)

CROUTIER, Alev Lytle, *Taking the waters*, 1992. (武者圭子訳 『水と温泉の文化史』 三省堂、1996年)

ESCOURROU, Pierre, *Tourisme & environnement*, SEDES, 1993.

FLURIN, René, *Cauterets Station thermale des Pyrénées*, Expansion Scientifique Publications, 1997.

GLAUS, Otto, *Planen und Bauen moderner Heilbäder*, Verlag Karl Krämer & Co., 1975. (小室克夫訳 『ヨーロッパの温泉保養地』 集文社、1987年)

GONCOURT, Edmond et Jules de, *Journal*, 3 vols, Robert Laffont, 1989.

HOERNER, Jean Michel, *Géographie de l'industrie touristique*, Ellipses, 1997.

LANGENIEUX-VILLARD, Philippe, *Les stations thermales en France*,

- PUF, 1990.
- MAUPASSANT, Guy de, *Mont-Oriol* in *Romans*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987. (桜井成夫訳『モントリオール』、『モーパッサン全集』第一巻所収、春陽堂書店、1965年)
- MONTAIGNE, Michel de, *Essais* in *Œuvre complète*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962, p. 756. (原二郎訳『エッセー』岩波文庫、1965-67年)
- Journal de voyage en Italie par la Suisse et l'Allemagne* in *Œuvre complète*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962. (関根秀雄・斉藤広信訳『モンテニョ旅日記』白水社、1992年)
- 小倉孝誠『19世紀フランス 夢と創造』人文書院、1995年。
- PAJAULT, André, *Bourbon-l'Archambault Cité thermale*, Expansion scientifique française, 1992.
- WALLON, Armand, *La vie quotidienne dans les villes d'eaux (1850-1914)*, Hachette, 1981.
- WEBER, Eugen, *Fin de siècle La France à la fin du XIX^e siècle*, traduction française, Fayard, 1986.
- 山田登世子『リゾート世紀末』筑摩書房、1998年。
- 山村順次『世界の温泉地』大明堂、1990年。
- La route des sources et villes thermales*, Édition Serpenoise, 1993.
- Quid 2000*, Robert Laffont, 1999.

Sur les stations thermales françaises jusqu'au milieu du XX^e siècle